14
4425

7/4
4425

宮內廳書陵部

10-5-29

文藝叢頒

# 答問の宿

長谷川之介

特
へ14
4425
昭和十年
五月二九日
購求

文藝

巻頭

（三月五日）

# 谷間の宿

（春・汽車）

（自然フラン3）

（以下欠）

一の宿

見水蔭

巻

一里（フラン4）

（以下欠）

□秋の日の、孫兵衛が早く入る谷間の温泉村。

何処の家でも黙燈の準備を[redacted]て居るの時、穂高川の吊橋を俥の走る音がしれ。湯本へ鉄道馬車の着いた頃である。

これで来れば客は唯この一輛の俥の、そわ[illegible]け

注意
會話の『……』は所々無し

らい。何家へ行くかと金村の人の注意を惹く程に今は寂[illegible]くある。

□靴入れのは川原の濠水樓。傳かふ[illegible]へ下されのは白ズックの一足。店にて事務[illegible]受取つれ女中は吃驚して。

『チヤ重くのぬえと』

□客は併し軽さうふ人だ。導かれて表二階の階子段を上ると直ぐ左側の川原に一室通されれ。其所へ入れば『十番のお客様』といふ事に呼ばれるのだ。

# 2 台

その

□十番の客は[redacted]早速靴を聞くれ。中は[redacted]は[redacted]ばかりだ。和洋の書を取[redacted]して床の間に積上げれ。そばの卓子の上に筆硯[redacted]ふど置並べれ。

□葉[redacted]燈を持つて来れ女中[redacted]が、赤ぬ女所へ置[illegible]へる。[illegible]ふ話調で[illegible]間に。

『暗い[redacted]』と客は云つれ。

□女中は吃驚して。

『然うでせうか』

『最少明るく[redacted]』

若い、精ぜん、色の青い、眼の鋭い人だ。脇目も振らず

『左様ですね、旅館の洋館ですから……』

『すると好い。仕方がない』

□女中が思ひ切って心を放した。小しは明るくなつた。

『米飯を早く食べて呉れんか』と前掛を結ぶ客は言調で言つた。

『はい、今』

『……』

『板を何まする』

お客様が書いてあり[illegible]

お客様の[illegible]

『……』

『ますの……』

『ほんとは無い、伝んでゐる。早くさへ有れば好いのだ』

『ぢやあ兄つくろひますから……あの、其間お昼るでもお昼はあつて……』

『昼するべく食事を早く……』

と、呼留めて。

『お心。』

□心得て

女中は[illegible]立れとする

これを帳場へ……と云て持ぶれ。

「おや、どうも……」と葉代のつもりで取上げかけて、手紙もふのる氣が著いた。

「紹介状がいるね」と客は言ぶ[redacted]

[redacted]岩場[redacted]お前知つとるか

「岩島さん？」

「うむ、此家へは始終来る[redacted]」

「あゝ、岩島さんなら[redacted]」

さんの所紹介で居ふッしやるの[redacted]

「然うだ」

「なア……」と言つて[redacted]

少時客の顔を見詰めて居たが、[redacted]

[redacted]

名轉して[redacted]階子段を一氣に駆下りれば、客は何んの考へもなく急いで下りれば、客は何の有る客である為に、一層注意を要する為に、それを帳場へ早く知らせるのである。[redacted]は解釋して置いて、扨て、これから位[redacted]当[redacted]

[redacted]身の置所[redacted]、その[redacted]宅の[redacted]指定を就て見[redacted]

[redacted]

□六畳である。次の間との境は文人畫の南紙で仕切つてある。二方が折曲つて、椽側

4台

とある。[redacted]

[redacted]扁額は襖紙を貼つて[redacted]飾

寄木細工の違棚が置いてある。餘まり

床の間は、女流書家なる者の書[redacted]が懸軸としてぶら下げてある。

り上等の座敷ではない。

□だが、眺望はよくないだらうと、障子を開け

て縁側へ出て見ると、その鼻先へ不意と雨戸を操

出された。[redacted]下男が、六七

枚同時に押出して来て、[redacted]

無遠慮な押しで締めて[redacted]

なく客は室に入つた。

待てと云つた[redacted]聴きもしない。客は暗い外は暗い[redacted]

5 右

□来ぬ火鉢が来ない。茶が来ない。浴衣

8 白縮緬[redacted]が来て居[redacted]らぬ。

、禿頭の鼻の赤い番頭が

□赫として客は強く手を鳴らした。

此が用でも聞くのかと思つたら宿帳を出して

頭が[redacted]入来つた。

「警察[redacted]が喧しう御座いますから、如何か

無くお記しを願ひます」と云ふ。

□いよいよ癪に触つたので、出名番地を

記した後、大森繁雄、二十五歳、職業の所

へ筆太に、劇作家。

□禿頭は、之を首を捻って『劇作家』さア、ゆっくり。捻って下りて行つた。

□温泉から出れば綾雄は益々空腹を感じて夕飯の催促をする氣になつた。

[illegible]

で手を鳴らすと、間もなく来れのは前のより年増の女中で、髪の薄い、色の成黒い、眼の

大きふので、障子を細目に開けて、膝頭だけ突入れる。

『あの、これから、お呼びなさいますと、直ぐの格子の呼鈴が仕掛けて御在ますのでミと用を聞かぬ為に』

『それぢや呼直すから、お前は下へ行つれふ如何か』と綾雄は言はずに固い皮肉を言はずに[illegible]

『いえ、それでは[illegible]』と言はずに[illegible]る。

『[illegible]食事を早く……』

6谷

「はア唯今[illegible]内匠[redacted]を召上りませ
[illegible]」
「いや、[redacted]食事だよ」
「豪勝のお給仕で[redacted]と云つてるのだよ」
「[redacted]食事だよ、イヤ[illegible]」
「へえー」と腑に落ちぬ顔をして引下つた。

□陰謀[redacted]の温泉宿は、[redacted]暑中で一年の生命を取るので、その他は年寄の新年へ挨拶して一さ

[illegible]は不心懸なる而して岩塩の言は[redacted]由[illegible]

7 治

[illegible]ニツ[redacted]の[illegible]論[illegible]侍[illegible]は紳士が[redacted]屋[illegible]して[illegible]そは[redacted]されるが、女[illegible]間を[illegible]且つて行くと、非常な優[illegible]。第一、[illegible]ふ[illegible]嘉[illegible]で[illegible]所を[illegible]入れて貰へる。奥二階の二十三番ふどは、上陸の間とふので、昔の大名[redacted]の部屋のそばで。それから女中一所懸命の[illegible]美[illegible]のが[illegible]敷[redacted]居るから、それ等を相手に[redacted]ぶと、どの位面白いか知れぬ。這んな効能を掌上並べれ上、自分が紙[illegible]状を書けば茶代も[illegible]入るから。

それで他の客とする親切うと呉れる。無論客料を割引して呉れる。鳥場合を由つれ、半分掛って、後は借りて来てもよくと云で、完然親類縁合の[redacted]であつれが、これでは悪くて[redacted]。

□此宿の[redacted]有様。

下宿屋をするは好くけれど、階段の隣の直ぐ傍で騒がしくて川の係り合ると云ふ所が知れぬが、水の眺望はよろしくて音の耳を騒がく、雨戸越しでさへ此位だ。

濃く淡へつゝ大なる書かぬ[redacted]ばかりを作家をいそぐる者が[redacted]すは、其が国



る。それよ、此のうち家中の待遇が[redacted]。

[redacted]不釣り合ひだ。茶代をばさあわかるだろうか。

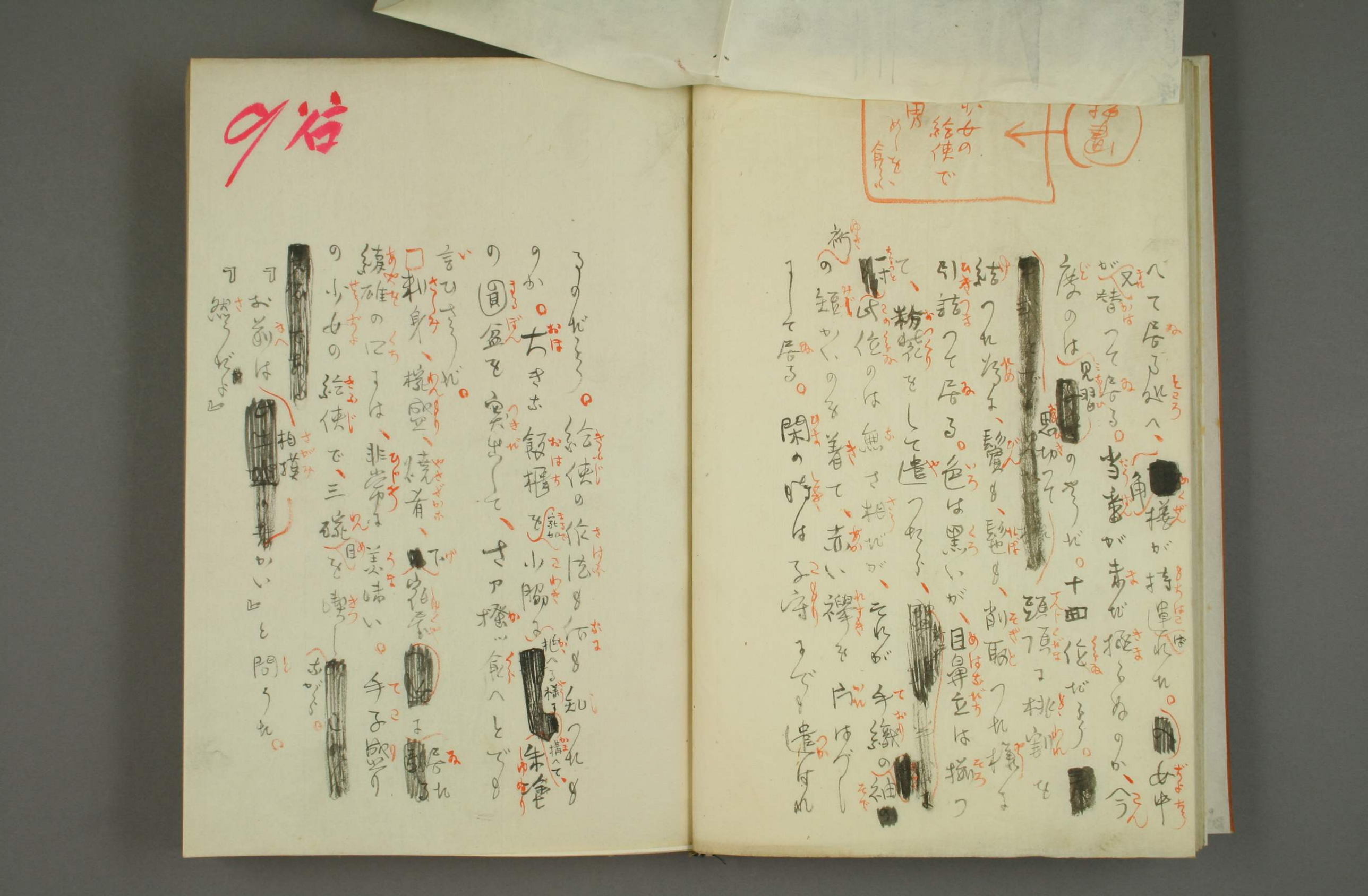
岩場は誤解される人であると同時に自分も亦能く誤解する人である。岩場を此家で誤解[redacted]して居て、変ふ待遇をして居るのを、それを又誤解して、優遇と考へて居るのではあるまいか。そう云ふ紳士を学び始めれ。

他の一通り貰つて[redacted]紹介状、これは考へを出すの物だ。擦潰した方が好いかも知れぬと考

淡流を両声と、輝くて喜ぶ[redacted]。

旧時人もく、いざ知らず。新時代の事作家をいそぐる者が

五藏人見通義




へて居られへ、[redacted]が持[redacted]れ。[redacted]が替つて居る。[redacted]角[redacted]が書が書が極るぬのか、今度のは見習[redacted]のぞだ。十四位だろう。[redacted]頭頂つ桃割を結つれ、髪を、髪を、削取つれ、[redacted]引詰つて居る。色は黒いが、目鼻立は揃つて、粉[redacted]をして遣つ[redacted]。[redacted]位のは無さ相だが、これが手織の紬の着て赤い襷を[redacted]はげしく[redacted]の紬やくのを着て居る。陳の[redacted]は[redacted]る守[redacted]る遣[redacted]れ

[redacted]るのぞ。給使の作法を知つれるか。大きな飯櫃を小脇に抱へる様に構へて朱塗の圓盆を突出して、さア撥ゝ食へとでも言ひさう。□刺身、椀盛、煮者、[redacted]下[redacted]は[redacted]居られ綾の[redacted]は、非常に美味い。手[redacted]の少女の給使で、三[redacted]を喫[redacted]

『お前は[redacted]相撲[redacted]』と問うた。

『東京を知いてるかい』
『何処へ初めて来れんだな……』
『相撲は』
『わしは早川』
『早川てえと……』
『小田原の方が近くいけ』
『[illegible]』
『おアよ、傳蔵でさ』

『傳蔵の姉かい』
『然うでさ』
『問うて見ると、早川と小田原とが女中の半、それを合めて居て、大騒ぎ嫁入り準備る成。
最少番く問ひれかつれが、茶をすすると、直ぐ飯櫃を抱へて立つてるつれ。綾姐は ぽつぬと揚る を置いて居ると、今度は櫃を引きよせ。
『按摩は居るかい』と問られ。

『[illegible]山合まさア』

『え、[illegible]真弥、そふ按摩が居る筈だが……』

『[illegible]真弥、て、按摩は居[illegible]ねえね』

『そんふ筈は無く、紺仕立を持つて来て[illegible]』

『あゝ[illegible]真弥さん！』

『[illegible]』

『[illegible]ぢやつてそつてそつてそつ』

『[illegible]んで、面白い男だ[illegible]』

『男藝者で[illegible]』

『目が見え[illegible]』

『女人でさ』

『後で呼んで呉れんか』

『療治は仕[illegible]ねえだよ』

『いや、話相手[illegible]呼びたいんだ』

『今夜は何[illegible]か知ふ……二十三番の客が今起きたから、之から一[illegible]興あるべ』

『でね』

『今起きた？』

『昼間寝て夜明しが続いたす』

『駄ぐだね』

『何者だい、宮は……』

『知らない』

□答へを申上げて去った。

□食後、綾雄は、二回目の入湯を試み、それから少し早くが寝床を敷いて貰って寝た。

□表二階の方は、誰の他も泊って居ぬか、森閑として居る。静まれば静まる程穂箭

川の水の瀬音、耳を附いて騒そくてならぬ。これを遠音ならば未だ好くが、如何近くては中々脳は[redacted]息するぬ。これで翌日から筆が取れるだらうか、と、綾雄は不安の念をさへ抱いて来た。

□すると その水音が、[redacted]叱咤の声の如くする聴られるのだ。海はこんなに如何しそうするのか。盲蛇[redacted]で世の中を進んで行かうとする。それで助かるかとふ誰の為とも知れぬが、枕の底から絶えず囁く

[redacted]思はれる。

□母の声とそれが変って、何時とで年寄りを唯一人、

[illegible]置くのだい。早く東京へ一家を構へて、

安心さして呉れる如何のかと言うかの如く

[illegible]取れるのである。

□然る思へばこそ[redacted]芸術を聴えるのだ。水の

音は何処でも潺湲の声は唯自

然を語るのみ。人の苦悩を向って、伝んで立入

るものかと思直して寝ようと打って見る

と、その声が[redacted]人の脳の刺し方

[redacted]を高く[illegible]て、今度は自分の頭が河底の

岩かの様に思はれて、潺湲は打たれて

へうする割れさうな感じがする。

□一思へば割れて見ると結構は考へれ

□潺湲と[redacted]は[illegible]の[illegible]

[redacted]の[illegible]の[illegible]

首を捻るのである。自分自身で[illegible]

[illegible]を得ない。

□[illegible]十郎は汝歴、[illegible]は世話[illegible]

汝と[illegible]実汝を[illegible]

[illegible]新狂言を演じ

13行

ぬでもないが、自分等の如き青年作家の旧式な[redacted]を脱離して新しい味を加へ[redacted]脚本を[redacted]て舞台へ載せて見れば、演劇[redacted]良しとは声のみたあるが、その実権は依然として河竹一派の作者が握る[redacted]で、[redacted]の掌握する[redacted]ずる限り。何の日か文士の脚本が勧[redacted]られる様になるであらうか。心細い限りである。

□已もを得ず、紙の上の脚本を書いて満足せざるを得ぬ。それとても、発表する適当の機関が無い。新聞でも、雑誌でも、長篇脚本の載せる事は上ることは、不評判で、古脚本を軟ぜるとふること、つまり、絶対に絶ることが、所謂古劇の作である。況んや単行本を出すことである。

□脚本の載せる事は上ることは、十年の後か、[redacted]の後か。[redacted]は、三十年の後か、[redacted]の後か。[redacted]は、千万年の後か。絶ることは、容易に無い。

新脚本の要求は、[redacted]ずるに、否、否、決して、そんな答は無い。少くも自分一人は、その要求を調べて

居る者である。滝川の陰謀と云はるゝ革命の為は奮闘すべく決心をして、然るに其の準備戦として、肱拳を突入れて居るのが、上海せられしと云ふことは論ずるを俟たぬ。

□前途は実に暗黒極まり無し。

その無光明の間に立て、悪戦を仕遂げ、後世の豪傑家でんのと、自ら名乗れる譯である。自分は奮闘に耐えるだけの

□

綜雄は此所まで考へると、急に人生身の血が流れ出さるかの如く感じてゐる。激格の鉄冷は甚だ。唯一つ頼ひのは、自ふのみ認めて居る。天才である。

□天才を信じて進ひのは、その天才の消滅した時程世に嬉しいものは有るまい。又其自ふのみ信じて居れ天才が他人に見ては何んでもかつて之を京阪間の果敢なさの極みだ。如く疑ひ出すかつて

すべてが一切

他を顧みずして、唯我のみ知を天才と思ふ

成るぬと敵を取直して

同意して、之を[illegible]無二の武器として、一心不乱に実践する。此の他は何の策戦計画を有せずして居る身の、妙程の勇猛心の時としては悲観に陥る事が無く、ぐも無く。

悲観は沈んで、河底の山石は綾雄は今、その悲観を自分の胸を[illegible]して、激流は砕られてんめる。

かと計り問へ始めれの一変されて[illegible]河

[illegible]忽ち又思想を[illegible]る大岩小岩[illegible]それが嘉果の現れ[illegible]それを実当る水は自分[illegible]

16位

大森綾雄は水の如く、へう岩と岩との間を潜りつゝあるすべの滝となり、淵となり、或は全く岩間を隠れ、底の底を潜み流れて、有ゆる壁色を神々しく、その岩とくふ岩を悉く打砕く。此の力は巳まぬの意気である。あの水音は自分が内喊する、その音響であると考へ直れ。

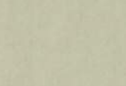
『うはッはッはッ、わッはッはッはッ』と何処からで笑ひ出れ。それが大勢の声のへすのである。高時を調査した天狗の声の様

突然

カラス

を思はされる。

□耳を澄まして聽くと、声は裏二階、二十三歳の方から来るらしく。



□明くる朝。昨夜の[redacted]は仏のとも云へぬ好い心持だ。昔、塔の峯の開山上人、その弟子[redacted]が悪魔を脳中に見るる恐びず。錫杖の先で山石を碎いた[redacted]が湧出れる。それは

浴せられるのが此所の湯の湯の草創と傳へてある。だけの靈泉[redacted]感じられて骨の髓まで温まる様な氣がする。

□出て、十畳の帰つて見ると、誰が来たのか知らぬが掃除がしてある。

[redacted]

火鉢には炭が活いてある。

早速[redacted]は竹鳥卷と梅干とを二重の蓋物に入れて、茶[redacted]の道具と一所に置いてある。川原の障子は残らず開放してある。昨夜から見ることしは待遇がよい。

□縁側は竹[illegible]橋[illegible]るが一脚[illegible]あるので、それを[illegible]を
[illegible]けて先づ後流[illegible]を見ると、思つたより[illegible]は涸
れて居て、川面は岩ばかりで、岩から岩へ渡
べば、[illegible]を裏げて向岸へ渡れさうだ。
唯、川上の[illegible]の吊橋の下が瀬切して、白雪を辞
くかうぬく見え、川下の折曲つた辺が淵を
作して、藍を解きたる如く見えるのが
然らして向岸は直ぐと石垣で積上げられて、
其所は[illegible]杉の皮葺屋根[illegible]家が三三軒、現き込む
[illegible]る石を載せ[illegible]河ふを



[illegible]樣に立つて居るが、その縁の下を利用して物置の[illegible]ま
で[illegible]が一目。
[illegible]の梅嘯橋
ちる処だけ泥黒くぬかつて居る。廿下る[illegible]が
堆高く溜つて居る[illegible]甘[illegible]が目[illegible]り[illegible]。
□れが、その居る[illegible]を見ると、ある程岩
[illegible]が賞め[illegible]れだけの事はある。左から塔の
[illegible]、右から[illegible]坂越、その山の[illegible]根方が両方から
[illegible]襟を合せる[illegible]ちて[illegible]を仕方なつて居る。
[illegible]黒土[illegible]松を廿[illegible]
る。圓味を持つた山の肩に[illegible]引をして
配置なく居るふと妙だ。

廊下の方より驚愕の極本立、式斯は洋畫で
行って、（窓ガラスは白ペンキ塗り）の[illegible]が見えて居る。その
旭光が射して、[illegible]燈でもあるかのごとく
眼を映じるが。湯場の縄簾、常盤木の緑葉
ぞる方面から、式一トむすぶ揺けては、揺てられ
れ揺る光線が来るぬ。ある程[illegible]陰濃ぜる
と緑雄は覚つれ。
□縄壁と縄壁との間を、苦心蒼鬱、濃水
が[illegible]流れて居る。それ以上の苦心蒼鬱をふと
（辛うじて）

式一ト村は
（水を堰んで居る）その結果として、日の影は山峯から山峯へと飛んで
居て、年中光線の落ちる時は
（無くとする）温泉が無けれども人の住む処では
いが、其代り、[illegible]
中[illegible]は[illegible]下無也。
すべては当然だと頷れ。
□榜を移して湯場の縄簾より面し
れ時よ、不図氣が著いれ。中庭を越して
（暑の客が群集）

2つ径

裏二階の縁側。欄干から柱、戸袋の傍へ掛けて、美人が鈴成りに生熟して成下つて居る。[redacted]

怖そ、つい、顔を赤らめる。美人だ。綾雄はハッと目を

いづれも此家の女ゆゑ、手拭で

美人に見える。赤い襷を掛けて、裾を端折つ

姉さん冠り[redacted]をして、白き赤き腰巻を[redacted]長く面影はして居るのが、手と手

と取合つたり、肩にさげり合つたり、柱を抱い

て頬を摺付けたり、欄干から[redacted]乗出して乳房を押付けたりして、一様に

此方を見て居るのである[redacted]る。何か自分の

□余程暇かで見て居たのであらうが、批評は既う

事[redacted]を品評して居れに相違あるまいが、綾雄は

嫌悪な噂らしき聞くのが嫌られど、

不快の感を生じたれ。

□睨付ける様にして、此方から見る。先方では

互に目語して居たが、どッと声を揃へて笑ひ

出しれ。

□其中には、最初に案内しれのも居る。◯二階目の年増のも居る。一ツは平凡、一ツは寧ろ醜貌、それ

が美人を見そる[illegible]のは、距離の加減であるから。他
糸推[illegible]則まるを辿る。小田原少女、早川少女、
昨夜の絵使を考れ漁師の娘が進化すると、
あれ[illegible]のだと、二三分時の経[illegible]
れ美人絵柳の[illegible]は消滅して、矢張り向ふ
の縁の下の、新置の中の粉味噌桶を對する感
と、[illegible]おつて来れ。
□忽ち湯女の凝結は解始めれ。裏二階の
此方の表へ通ずる廊下、彼方此方と雑巾掛
を敢じて、欄干のすれ〳〵を帯の結目が押立

て、まり掌ふ。
□とえる間ま、二三人此方の廊下まで押寄
せて来れので、黙って綾雄は自分から引
下って、室に入つれ。障子まで締めれ。

ここに4

新墳の□中は、お栗とふのであつれ。それが今
朝は絵傳る考れ。綾雄は
黙って茶碗を出す。向うで黙って盃を

ます。変な調子であつたれ。
□綾雄が妙う軽く成つたのは、一寸した調
子がら脱れたので、ゆるぎし。[redacted]
之が常といふ譯ではない[redacted]。自分でも
それは知つて居るが、然りとて此女があわれので
は、機嫌の直りやうが無いと考へつて、二碗は
して茶[redacted]はすべく[redacted]れ時々、[redacted]
川の方は大爆声が起つて障子がびり〜と
乾へれ。危く茶碗を取落す
□綾雄は吃驚しれ。

22石
処であつたれ。
□言葉は其れ切り。[redacted]
□お栗は平氣で居[redacted]然うして吃驚しれ綾
雄を笑ひ顔である。
『あれは何かね山』と綾雄は問はずなれ
居られなかつれ。
『石割ですよ』と事も無氣に答へれ。
『石割り？』
[redacted]初めての方は何方です、吃驚なさいまし、屹と
ますが、あれは宿の主人がお上へ頭ひきして、

川の中の石を、ダイナ[redacted]マとかいふ藥で割るのですよ。

『ダイナ[redacted]マ？』と聽き咎めた。

『はア、ダイナ[redacted]マ[redacted]』と溜息をついた。

□綾維は可笑しさを耐えながら。

『何んの爲に[redacted]石を割るんだね』

『お客樣が[redacted]何か[redacted]』

『然う[redacted]仰有いますと、如何[redacted]』

『水の音が餘り高過ぎて、聽えなくって、いけないのでね。それで主人が心配致して、水の当る山を無くしやうと為るのですよ。』



毎日石屋さんが来て、コツ〳〵鑿でこをかけて、それへ藥を詰めてはぱつと割る。分の[redacted]

□大事業だ[redacted]。人工で自然の[redacted]を殺がうとするのだ。これは考へれば確は考へれば。

□お栗は夢を追いで[redacted]

『貴郎は、眞偽を[redacted]なんですか』と[redacted]が[redacted]れ序をふて問掛けた。

『いや、夢だ知らんのだが、紹介狀を持って

居るまで……

『矢張り岩場さんしかゝるですか』

『然らば』

『今日、呼びますと』

『いや、何も別に呼ぶ程の事は無いが……』

『時は何んでさるが。按摩は仕たくさるびぬ』

『すッかり お暮くれつてるのですよ。既う貴郎、藝人氣取でするぬ』

『藝人とゞへば、所謂藝者が居るかい』

『居ますとも』

『美しいかね』

『そりゃ 大変美くしいのです。今歳 四十六歳てそのもするぬ』

『その他』

『六十三とくふ義太夫の師匠が居ます。その亭主で遠十とふのが、落語家もしますが、理髪師もしますが』

『どちらが 本職ふのだい』

『どちらも 本職で無いのですよ』

「七十三の婆アさんの亭主ある、餘程の金藏
だろうが」
「それで三十二でするから面白いでぜ」
「仁侠揃ひだぬ」
「全くですよ。○連中の内では、如何にも
眞强さんが眞打ですぬ、藝も有りますし
一番仕立ぬ上手いですから場
樣が中々賑ふまくさうですが、[redacted]目が[redacted]
[redacted]ぬ　不自由で
「氣合が大層ぬ」
「ばいてえ話だが……」



「如何だろうね江戸子の千ヤキ〳〵でするぬ」
「他の者は江戸ぢやアふくのかね」
「如何だるね」
「時さんは江戸だるね」
「然う見えるか」
□何が見えるかと思ひあぐ、綾雄は
唯笑て居れ。
□大分これで味和して居れ
「いづれ後程樂でゝ參りますよ。内見原
でぜうかるぬ」と言て樣を引いた。

□[illegible]て[illegible]るものか。[illegible]どころでは無い、ダイナマイトで石を割る[illegible]上の大事業を[illegible]ねばならぬ。[illegible]

## 文

□史劇「[illegible]」を題して

[illegible]文覚は[illegible]筋は既に[illegible]夢を[illegible]いよ[illegible]

[illegible]文[illegible]書きを[illegible]為は、静養を兼ねて[illegible]は[illegible]

[illegible]草子を[illegible]向つたが、[illegible]如何[illegible]熱[illegible]

[illegible]

□文覚は旧肢[illegible]を主人公[illegible]する。

[illegible]が、新[illegible]書下さ[illegible]のである。[illegible]は[illegible]

[illegible]見れのである。新[illegible]血の通つて居る肢[illegible]を

[illegible]世[illegible]示すは、[illegible]

と考へ[illegible]比較の取れるのが[illegible]

[illegible]

□文[illegible]近来某大家

[illegible]は[illegible]

[illegible]

□元分の巣が走[illegible]と思つて来て見る

と、然[illegible]は行かぬ。水の音が如何する騒そしく

てならぬ。その間を調子を取りながら、コツ

コツ石屋の鑿の音ばかりで[illegible]

[illegible]て居る。

□何時なりしか。半日。

□食後の[redacted]は、新聞[redacted]が来たので、斯うして居ては何んびか

二三枚買って、それから読んでゐれ

ども、筆を取ったのは、仕方が無くて、

濟まぬ氣がして、[redacted]が多分

無くて、[redacted]

[redacted]と、二階を降りれ。湯に入る

□裏二階との中間にある浴場へ行って見

ると、今出れば、[redacted]紳士[redacted]

と、女主人[redacted]

行かず知れぬと考へれ。

□自分は何時[redacted]の[redacted]人と新婚旅行

[redacted]か。歩む[redacted]を好く[redacted]

出来ずにゐる。

―者が肺[redacted]

[redacted]

る。それが出来れで、何事の反響も[redacted]

れぬ。心細さは それ計りでは無く、[redacted]の女は自

分を對して、どこ

も歩む分のめるいふ心で居るのから、それすら

衣を解いて湯に入れ。

□階りの浴室では[redacted]若い女の声と湯み

[redacted]紳士の声とがして居れ。二十三番の客で

ありさうに思はれる。
□室に帰つて、濡手拭を欄干に掛ければ序[redacted]に、椅子に依つて、又川の方を見ると、或る程る石屋がコツ／＼、氣長に岩石へ孔を穿けて居る。[redacted]それを同情しつゝ見て居る處へ、廊下を足摺りまして（挨耳する仕事だと）、少し反身の男が、此方へと來[redacted]る。何やら小唄を口ずさみながら（手[redacted]を突き）（藤八の狐といふ様な）
ぜーつゝである。
□無言で居るとも、突當るかも知れませんで、綾雄は

28台

咳を一ツしや[redacted]かと思はれ。けれども出ぬ[redacted]のを強て出すのも難しいと躊躇して居る間に、直ぐ[redacted]（既う）眼の前へ來られ。
□白ッぽい縞絣の双子を道行にして着て居る。[redacted]額が接け上つて、大分頭の禿げた光つて居る。[redacted]顔色は蒼白く、苦味走つて居る。
但し眼潰れて居る。
（眞物）とは之れだなと綾雄は覚つれ。
』へえ、御免下さい』と[redacted]さびの有る声を出して、室内の方に向いれ。

『あッ、成方だまと 綾雄は言つた。
『おや、[redacted]所ですかい。旦那、人が悪くね。
さすがは岩場さんの[redacted]車屋が[redacted]と
[redacted]苦笑ひそ[redacted]れが、軽く頭を
下げた。
『へえ、今日は[redacted]と指指[redacted]。
『岩場から紙[illegible]を持つて来てゝん
だがね[illegible]
『左様で、お栗から唯[illegible]聞き[redacted]
しやつよ。[redacted]お着きださゝで[illegible]

『別[illegible]大し[illegible]用で[redacted]
ふふかつたが、幸[illegible]持れて[illegible]
指[illegible]を[illegible]れて[illegible]手紙を[illegible]と
『旦那、あッし[illegible]が手を取つて仕[illegible]が
ありがんや。[redacted]序[illegible]
てさくふ。
『讀んだッて宵[illegible]
俺の方達で、ちゃの[illegible]仕[illegible]が[illegible]
宵[illegible]く頼む位[illegible]偏人が行くか[illegible]
『幸[illegible]えぬえ、ちゃの旦那[illegible]
[redacted]貴[illegible]は[illegible]

人の紹介状を持って来れるんぢ』

『知つて？』

『知つてゝ、ヘヘヘ、憤ッちやアいけませんぜ』

『憤ッちやアいけないって？』

『あッしは此通り、思うれ事ッかりでも世間でも知れず評判が悪うがさア。

世間でも、旦那の前ばかりでなく、岩塩さんの評判は、此所ぢやアあり手ぜんぜ』

『然うらぬ』と結局は肯ずん。

30位

『旦那、[redacted]すし』と言ひつゝ、手[redacted]

兄者をはけて、嶮り[redacted]

煙草入をぶらして、角細工の筒をポンと[redacted]

『[redacted]ばが、あッしゝ言はせれ[redacted]ア岩塩さんは

面白い人でさア。[redacted]は[redacted]

さえ[redacted]ろ、小[redacted]さん[redacted]ろ、あの[redacted]車[redacted]は

望んぶ面白い人すがね』と言ひさして、指の

先と煙管の雁首と一所に火鉢の灰の中へ

突込んで、恐る恐る、人を探りつ。

『誰が、宿の方かぢゃ、鼻摘みさまね』

『そんなる評判が悪くかぬえ』

『何う貴郎、私惚れて行んれいてお話る知りそんやの。何■れ因果であんふお客様が見えるってぬ、を掃かるめ。ぢ、堪んふ泣いれるんです。を人は右腹の人ばかり、笑ッちゃァ居すれがね』

『ふむ……』

[illegible]馬車の書が掛らぬえ内ですもふ、

[illegible]

夏場だッて成頃のそうは有りそんやの。書生さん達ばッて、緊張ってお寒い[illegible]れんですが、その時ばは、お爺さん遣って来れのが、梶田さん、小僧さん、岩場さん、行んで同じ様ふ組が六人。女子[illegible]有りそんやの。女中を追廻す。取抑へて蚊屋をくくるんで、戸棚の中へ押込むぬ。泣ぁと叫ぶと、お播ひちんざァ有りッ子ふし。あッしをお爺さん、寝つて集って、裸躰して、背中ぁぁ、腹ぁぁ、字を書く、絵を画く、墨茶茶墨よ

塗り終りて、従来へ突出すぬ。如何ほんざア
お爺さん』
□いつも問うて、お爺さん呼ばりじゃ。
『夜の二時頃、[illegible]が起きて、草履
れてきめる、[illegible]穿いてえると、[illegible]顔を[illegible]鍋炭を塗る、
髪の毛は[illegible]を[illegible]ける。それから、お爺さん、
料理場へ入りこんで、厨棚の口を開
で呼[illegible]出すぬ。中[illegible]は、お爺さん、飯櫃を開
けて、握り米飯を俗へる。精味噌のはから、胡瓜
を出すてえ、お弁当。それから、お爺さん、
[illegible]を持て、

一枚開けて、世間から、上草履の音、
の戸を[illegible]、[illegible]、[illegible]棒が入るぞッてえのが、指差記。
ぱッて、車中[illegible]ぞッ行こうと知ずさ。
車中[illegible]行こうれ
ろうと思[illegible]つてる[illegible]と、世間[illegible]ガタ音
車を二基置かれて、道原[illegible]を読んで、帰つ
て来て、又六浮れさ。世間の基礎ちん
ざア、如何ふつてるんだか、分れッたぜんや。い
や、既ろ、そんふ澤ですから、岩塩さん。
市車中、てえと、知るる。知るる。
ってすさア』と説明しれ。
[illegible]を顕

『それぞ分つれ。』と綾雄は椅子と共に
頷いた。（僕も女手だと思はれたんだね）
『ですがね旦那、岩場さんも小關さんも、（大層出世なすッたてね。）
それから櫻田さんなんざア、若手の役人で、ぱり
ぱりでいッてね』
『然うだよ』
『奇麗ぶんで、その御連中が[redacted]遊びは見えて
さすがね、一年々々音無しくなるから不思議
でさア』
『年齡を取ると勇氣が衰へるのかねえ』

『それでさア、あッしは何時もそれを
言ッちやア、三尾さんをヘコますんで。若い時は
馬鹿をするのは誰でもでさア、憚りな
がら古瀬右近衛少將源ノ眞鍋は、いくら
年を取つても少しも若はねえで、馬鹿の
有ッたけを盡しやすッてね。然うぢやアあり
ませんか、古森の旦那』
口ぱんと吸殼を（火鉢の端で）叩くと、横へ飛んだ。[illegible]が
焦げる[redacted]の[redacted]知るまで居る。（磨きました）

□ [redacted]か三番と記憶する。[redacted]は書集めれのが有つれ。その中に[redacted]を書き[redacted]を理屈をいふ[redacted]辭といふのがある。眞鍋はそれを近くだが、[redacted]を山越つれお世辭を並べるより、どの位ゆかい[redacted]と綾雄は考へれ。

# 岩坂

□ それから眞鍋は、二ツ三ツ軽く世間話をし、それ後、三ツ三番の客が、暁ろ陽から出る頃だと云つて、煙草入を腰さしつゝ。

「旦那、[redacted]時に[redacted]遊びに来ますぜ。」と云ひ[redacted]、例の手ぶらぶらさせて行つれ。

恩数でも施すと云つれ調子で

## ファニ4

□ 谷川の水音する。大分耳を馴れて来れ。石割の響声する。格別驚かなくなつれ。序幕を半分書き得れのは三七日[redacted]。

□湯に入ってると誰かが脱ぎ捨てた香水の匂ひが一人で占領してゐるので、つい、気持を
して、ぱって見ると、部屋には客が来て居る。
誰かと思って、前へ廻ると眞弼君だ。
『へえ、所為下世話ですな。お留守居をしてゐる。
……』と言ひつゝ頭を下げた。
『あッ、眞弼君か』
『所無沙汰を……』
『あれッ、見えかッたな』
『えゝ、湯の場の客が、やッ言って来

55 右

ますしね、此方がやッ二十三歳のお客が雑さ
[redacted]んですもんね』
『意地っぱりだね』
『えへゝ、然るでも有りますんがね、忘れ用
所為屋敷だと見えますね、何方からお相
手ッ手ぱれますね』
『眞弼君は雑談が巧いからね』
『いえは、然う申しちゃッ仕んですが、湯
場の新聞はおもしろくて
雑談の持ちきりで
者でふくいちやッ、全く動きりゃんや。それ

8 下卑れお話で巻を置くのぢゃいくく
8 有りそうながね」
「談話は難かしいもんだね。僕ちんざア、
如何8、知る上合うは、人と談話をするが苦
痛だね」
「旦那は何んですッてね、如何8氣離かしく
お客様ぢゃ居ないってね。廿巻へは寄付けぬえッてね。お給使
すぜ。十巻へは寄付けぬえッてね。お給使
ま[redacted]てる寂屋で、居鼠が蹴の上へ坐く乗
て居ぬえてえますぜ」

「然るのぬえ
「[redacted]素法にて8利かぬぬえ居ぬ仕えますッ
てね」
「自分では動めて何か話掛けてる8
りがが……」
「そんがね、時ぢゃ何か言けれと、痛いッ
てえますぜ」
「そんかかア」
「[redacted]ですけども旦那、皆んな お爺さんを
置めてますぜ」

□お爺さんが出ざ〜れ。綾雄は茶を注いで
[redacted]
『上げたり下げたりするふァ』
『本統ですぜ、岩場さんの時紙やうちゃ
ァ絵ッかく方がッてね』
『つまり僕を見てそこふつれ講ちんだよ』
『章えぬえ、全くでさァ。だが見てそこふら講
ですよ。あしら何なるのぬえのね、且那は何を
してえます。
[redacted]
□[redacted]じゃかく自分の知るぬが、世間的の者ふら、這ん

伝処へ動める方ちんで……』

ふ無義理を問ひ、何と答へるだろうと綾雄
は[redacted]思ひつゝ。
『伝処へは動めては居ないよ』
『結構ですね、独んで暮らせるんだから』
『』
『独んでは居ないよ』
『へえ、然うですか』
『代へ来ても、一生懸命に勉強して
うんだよ』
『女中達の話ぢゃァ、猥語を言ッちゃ

ア行か書くてすすッてね。書き紙が商買ですか。

□書き物が商買とは甚だ〳〵侮辱が、まさか眼の見える都閥に向って、劇作家の権力を示すでもあるまいと、結雄は苦笑〳〵もがら。

『すると、ふ者が結構ですね。俺をお嘗んあさるんだね。あいしは眼の見える時分は、偽名埴さんや高島さんの以へ、ちよい〳〵

38

治

『拝びを行つれますで……』

『君も、発句の作は出来るんだらう』

『えゝ、少しばかり雑俳を嗜りましたが、難かしうございます。それも如何も眼が不自由の成つてからは、考へて、それを書付ける[redacted]譯に行かぬえので……』

□それから持句を三三ツ聴かされた。

川柳吟

狂歌、どれも感吟はあるぬ。

歌澤の替歌、これは[redacted]膝の上を叩くて調子を取りながら、微吟で聴かされた。後は話が芸居に轉じて、[redacted]

彦[illegible]郎と、田之吉まで、とかいふ、その四の[illegible]
評判[illegible]が出て、今の圓[illegible]十郎を、依然として
[illegible]大根あつかひ。[illegible]

□綾雄は、山上嘉[illegible]の談[illegible]を終て、
[illegible]を得るので、[illegible]欣んで、[illegible]傾聴[illegible]れ、
□如[illegible]う[illegible]いふ話は、[illegible]人[illegible]は、愛[illegible]して、長
れぬと、[illegible]れを、喜んで、聴いて、居れ
るので、[illegible]は、大得意で、傍[illegible]で
書[illegible]
[illegible]

少かるず興味を感じ、又参考とすべき[illegible]

□[illegible]これを、聴きながら、不圖、綾雄は、[illegible]
れ[illegible]。東京でも、輝の、江戸ッ子を、見る
機會は、現在の、自分として、甚だ、少ない。山
の手の、下町[illegible]を、居て、[illegible]生[illegible]、[illegible]文
士の、仲間入りを、[illegible]れ、者は、江戸[illegible]を、説くの
資格は、無いので、[illegible]が、今、偶然、[illegible]、所
[illegible]陰澤で、[illegible]その、江戸趣味[illegible]を、接[illegible]、[illegible]
が、出来[illegible]。東京[illegible]、江戸ッ子は、[illegible]の
歴史[illegible]、知らず、[illegible]、変化を、見て、居るだけ
が、此所の、山間に、潜む、眞[illegible]は、原状維持で

居る。眼が見えそうで[redacted]動かされたのを知れぬが、盲目だけは、明を失つてゐる後の変化を知らぬ。変化を知らぬのは即ち進歩を停はぬのである。時世粧れがして價値を上げて居るのが。眞鍋は保存すべきんだと[redacted]思つてゐる。

□眞鍋は又、綾雄がそんな觀察をして居ることは知らぬ。氣絶を怪く愛けて居られるので、祝儀を摩山世眞つたりを嬉しく[redacted]さえ[redacted]夕方[redacted]で居れ。

□夕氣の給仕で来れ　お栗は、綾雄に向つて。

『お嬢　お話が弾みましたようで』と言はれた。微笑を含んで

『うむ、珍らしく長く居たぬえ』

『眞鍋さんのお客がお立ちまつりでしたからね、これからは妙絶参りますよ』

『あッ道理で居て美いて居れば』

『既う雪は霜枯ですものね』

『他のお客は……』

『豊吉の他は、[redacted]最一方お花で[redacted]す。[redacted]それ
陰りふんですよ。妾達はお邪魔
を致すわ
『だって、僕の[redacted]高も氣難かし[redacted]屋だもんて言
て、[redacted]だやアあいか
『あッと眞さんと隠居だわね。そんな事
でお世辞りして
『岩鳥の直中まけ珍くいって、貴あれ
程迄紫つたよ
『あッそれは全くですよ

『べんきょうは
勉強中は
来て貰ふ。全体幾人ぬゆが居るんだい
『チビまで入れると十三人居ますよ
『大変だ、そんなに居られては入りかれ
ない
『お金持を[redacted]廣い処[redacted]取巻へるぜ
『廣い処は寒いだ
寒ければ次鐘を撞いて入れるわ
『それぢゃ炭が大変だぞ
『山ふは全人の物です

□[redacted]
車戯であるが、共閑自らの[redacted]
唱ラシメ
相性の露
綾雄は之を聞き気質の表出として認められる。

□部屋を変更するとくふの同意そうれる。
今度は[redacted]十七番で[redacted]である。二階は彼の二十三番と当る。此稽古は治ど中絶せ[redacted]で[redacted]れる。

□此所は閑寂ほうい。次の間を開けると、どんち騒ぎで出来る。水の音もいくらか乾く成って居る。女中達が拵びを来るのもよい。

# 第42号

□[redacted]綾雄が勉強するのもよい。

□勉強して居る時は嘉重されればよいが、こんな車中では駄目。綾雄が若い顔を して居て、少しも恐れない。女中同志で巫山戯る小僧等とする、大変だ。

□最初は窮屈がって、チビる給仕をさせられる。給仕の女神が、如何して逃げうと狙れ回ぎれかと、了解される。綾雄は一寸と研究して見れが、直ぐと他の客が居ふくふつれの[redacted]で、暗がり素れと云ふ事と、帳場の嘉い[redacted]で、彼等の

勝手な集合が出来ることそれも[redacted]

[redacted]である。

□それは、客の処へ入って接ぶことふのが、彼等の習慣性で、それが客の多い時は[illegible]ほど

もって、面白くあれば[illegible]

さぬが、少くあれば[illegible]

ふ、つまり[illegible]の[illegible]

始めて、後のは[illegible]

つけるの接[illegible]

□[illegible]

[illegible]

[illegible]

此所が繁昌することは、自分より[illegible]

のが居るのれ[illegible]

□[illegible]を車で[illegible]とするは[illegible]

[illegible]それは[illegible]は女性の研究をするのである。

[illegible]青年の作家の一番困るのは、女性の描写である。誰

で然るであるが、自分はそれを負し

くある。[illegible]作家が下[illegible]を散察

して、材料

文学上の[illegible]

[illegible]値[illegible]でふく、[illegible]その

[illegible]取扱の[illegible]

る就て、一部の[illegible]

[illegible]は笑はれる。現編を

立て云へば、下宿屋の女房が、本宿屋の女房である。

[illegible]が。それも上の女性を知らぬと云ふ、樂屋内の[illegible]の[illegible]を見る方法は非常に実際を見れぬである。自分が此所で温泉場の場[illegible]を[illegible]観察する[illegible]の[illegible]、それと距離は遠く離れぬけれど、併し、五十歩と百歩とは矢張り差を調べる。湯[illegible]は歴史[illegible]がある。[illegible]背景が山間の[illegible]温泉宿、嬉入り準備をする時此所へ来て[illegible]ふ、條件が



種々附随して合る。所が綾雄は[illegible]して、[illegible]ぬ様に成つれ。

□ばい氣で、益々繁昌する。名も古賀[illegible]記憶れ。年齢も大[illegible]紅つれ。お栗は出戻り、まゝ[illegible]くのは、お千、栗輕ふのはお千、少しもなるのは誰、[illegible]つ。

□綾雄は言へてある。

何んぢか葉[illegible]言入つれ様ふ氣[illegible]

45 宿

まるのである。

□或日、五六人で集まって居る時、(紳雄は)怒って言った。

(俺の部屋)

「僕の部屋ばかり汚くって、少しは[redacted]の客の部屋へ行って掃んでもいいと思ふ。」

□何時も客が多くって、何時も客を断って、秘密が無ければ、考へる。

□コツ〳〵石屋は川の中で鑿を遣って居る。(槌を)

紳雄は山を切って穿ける程筆の先を力を入れて居る。二幕目が脱稿した。世間は客が一組二組無くても無くが、それは勝台の目自でけふく、山林の役人も、塔の掌の参詣者もかで、晩を著いて朝は立てるのだ。

□品物を運ぶ俥の音は、宮の下へ行く俥へ

の客か。竹を[illegible]男子荷[illegible]者か。[illegible]薩摩

へ帰るのは孤どもあるぬ。

□[illegible]三[illegible]の稲荷寿司を買は

[illegible]雄は[illegible]して居る[illegible]へ、ざ[illegible]

せて、女中達は[illegible]徳[illegible]して居る[illegible]誰[illegible]

と障子を撫でる音。[illegible]

[illegible]

□女中達は、そ[illegible]と知ると[illegible]目と目

とで合図[illegible]、[illegible]は[illegible]、綾雄

する。手真似で[illegible]知し合ひ、

息を殺して潜[illegible]沈黙を強入り置き、

合点が行かぬ。[illegible]綾雄は、何の事[illegible]

[illegible]

46 岩

「へえ、ヘラ日は……」[illegible]屋さそこで……」と言

ひながら、障子を開けて、真[illegible]が入来れ。

□女中は[illegible]そとばかり目顔でふ[illegible]

聞くと[illegible]

[illegible]

[illegible]

「あッ真[illegible]君、好く来たね」とにこやかに

「且那、お一人ですか」と首を傾ける。

「……一人……」

「すてね、人間ふ[illegible]臭ひは仕ぬえが早

川へ打上げれ海豚の土左衛門の臭ひが[illegible]する。

あれ他は 稲荷壽司 [redacted] ンと来る[redacted]が
どちらも年の出せぬえ 代物さぬ」と思ひ
れ悪口を 平氣で言って 喧嘩した。
「まア 隨分ぢめ」と 耐るふくふって 一人
が叫ぶ 續いて ニ三人 立上って 物そも言は
ずに 直彌[redacted]の 肩を 一平手でぴしゃり。
「おや、海豚は 赤ぢ ぜきて 呑ちんぢ[redacted]
見そこふって 驚きあかって [redacted] 勘思って
呉んぬえ」と [redacted] 笑ひ ひしゃれ
「出行って 怒りにが 悪くんぢる」と 一人

が言ふ。
「お前達が 人が悪くかるぢ。 邸の兄えぬえ
者の前で 隠れん 坊をすると 酒落る 脇ふ
ぬえや ぬえ旦那 然るぢゃ めぢんか」と
少し 「」する。
「まア 仲直りよ 一ツ 攫んぢふ 坊か
ぬ」と 續 維はいふ。
「頂きます、 隠れぬえ 事 は 中地では 之
ぢ 地走ぢ。 それ 鮨 [redacted] は 江戸
ですね」と云って 直彌は [redacted]

『あゝ夢さうぢゃ、十八年ぢゃと、くるりと[redacted]掌で頭を撫で[redacted]れ。』

『[illegible]荷蓙[illegible]で、懐旧の情を煽ぶるのは軟弱だ……』

『[illegible]へは、[illegible]多くつまらぬもの』

『小(ちさ)[illegible]へ、[illegible]五六年[illegible]せうもない。』

『[illegible]でお前さん、年は三三度[illegible]薩摩[illegible]は妙くて[illegible]。』

『十八年[illegible]』

『あゝしが初めて[illegible]所へ来れ[illegible]』

『お前さん、お話さうぬ。[illegible]首が今れア違って[illegible]川を渡りめえで、直ぐと山[illegible]入[illegible]て七曲の[illegible]へ掛つれのぢ。』

[illegible]

『吊橋が丈時代は土橋でね、宿の[illegible]表二階は向きが川の方で[illegible]』

『そう始まうぬ』と女中達は顔を顰め合ふ。

『まア面白さうぢ。静か煙管[illegible]……』と縞雄が制すと、真彌は[illegible]

『第一、その時代の女中衆は、意氣で、人柄で、親切で、酒落が分って、情知りで、藝人[illegible]』

『[illegible]』と誰[illegible]。

『だが、お前[illegible]』

新道の開けぬえ間は、然うぢゃあ何んぼ
けれど、お客の種が違つれぬ。本統の場合は来
る人ばかりで、くくり短くって、二間半と三
間間居ぬえ人は、ふかつた。長いのは半歳も
逗留ぢゃく、お客同士で親しくふるまひ
縁さぬ。家族の者ぢゃて何んぢゃて親類同
様で、面白の笑く世を暮つれるんだ。
「魏おの絵葉書を見ると講釈
の客席が有つれッけ」
「それァ、あいしの書れ時分は渡れて居
すれが、大ら場を金之助が聞いて大
笑りでぬ」
「藝者は……」
「旅籠がちゃ〳〵来き〳〵れッけが落書
いちゃァ居ちゃんや。左頁の山家は名代の
ぬゆが居て、箱根七湯、神奈川へ降りては三
鳴る旧陣、相模では小田原大磯、先づ
其中での美人て云ます。
は、ほい米櫃すて居ますよ」
「美人が居れッて？」

「何ろお前さん、京陽のお[illegible]小紋へと云つては、東海道の行止石、それは小紋の中山だが、[illegible]陸奥のお小紋を見ちやア、素通りがせの素ちく、てえ程の評判で。他の陽家が霜柱で、此家ばかりは、わッわいてえ程の大入れでね。世竹でさア、色が白くッて、鼻外地が通つて居ても、親元は何んの[illegible]と云へぬえ愛の嬢がありて、第一、髪が濃くくッて長くッので、鬘の[illegible]何も入らぬえ位。それが髪洗ひる陽場まで駄[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ、見物が大変で、あッし



ちんざア お客の後から踏基る無て唄いれんで」

「世の代 お前は眼が見えないい」

「へいと、眼は江戸は居る内から イケなせんぜ」

「見えちくのよ、唄見ふふふふ」

「[illegible]まア お話で[illegible]ふふふ」

「さア」と言つて一服る

「真鍋さんの話は、アテる眼つれるんぢやないだよう」と 中連は 他言葉でせて

# 付箋

暗るのである。

「いや、誰でも人は、既う見られぬえ。それがへてくれば。いくらお栗さんが、当時[illegible]の美人だろうが、お小夜さんの[illegible]踵を擦つれ中俗は四んだ軽そうな[illegible]ぬえ。

「隨分ぢめ」と、お栗は怒りだした。

「それがぬえ、その[illegible]のお小夜てえのが、又凝性人でね。駆けれが駆くで又[illegible]人氣が熱を持つて、鑿で氣長は

コツ〳〵当[illegible]

「石山寺ぢやアあるまいし」とお栗は茶を入れ[illegible]。

「中[illegible]は強[illegible]を挿込んで、一息に打砕きて陸つれ大盡があつれが、それが妙ふので、人間の恋は海豚手[illegible]うは分らぬえ。

[illegible]貧乏が留つて暮れぬえで[illegible]れ、[illegible]の若[illegible]と思[illegible]通[illegible]どの位貢いだ

それが又[illegible]不男で見られぬ[illegible]ラッカやアぬえのよ。

か知れませんや。するとね、お爺さん、[redacted]お話
さね、その若衆が脚気を踏出して腰を抜かして立て
ねえ、おやアありませんか。昔は躄の勝五郎も、箱
忍隠の水行で、ええわ結花が治しれってえ箱
根の山で、あべこべは躄を抜へちやッれ
ふざア文明開化さね。それであッしが、数
へ歌を作つれ。節のけましれぜ己
□膝の上を叩いて調子を取りあがる、例の微、
音で唄ひあげしれ。五ッまで数へぬ間よ、
女中は大騒は散乱してしまつれ。綾雄は

5エ号

到頭、十とせえ、手で聴かされ。

1224

□真偏がお喋りを[redacted]てさつれ後は、飢餓
しの稲荷寿司が皿は寂しい。女中達はあれ限
り来ふい。綾雄は弟子は代つて筆を執ふ
うとしれが、興が乗らぬ。想は昔に走つて、
新道の開けぬ時代の[redacted]荒澤が真偏の
話しれ通りは澄んで来る。
□70ふく馬車で8[redacted]湯本までしか来なかつ
汽車は神奈川で下りて、それからは鉄道は無し

たふ。それからは旧時代の遺物なる山加屋
無ふか。大阪は徒歩である。今は新道ばかり見上
ると、川向こう暮くなる。橋が杉木立の間に現はれて
居るが、すれへば[redacted]それから茶屋の下を過ぎ
て、塔の峯[redacted]の石畳道とへすーるである。
かく、却その不便。一寸曲って直ぐ去らしてくふ
じでは、[redacted]陰峯へは曲がられ[redacted]ふかつれ。
□吊橋[redacted]が土橋であって、表二階が川に向
いて居る[redacted]すは、[redacted]立方の[redacted]和洋折衷
立の無かつれのは自論である。

蒸三階が

修そとして

繪双紙女優の古風の場合は、

# 名石

鯉は片身売
買ひ合つて、
薩摩の陸奥の
一家族。

長屋の客が、見廻の人の中まであつ。
の驚く、[redacted]碁を打つ[redacted]して行く
[redacted]将棋を[redacted]指す。

[redacted]ぬい月日であつれば。天地で
あつれば。一日で五時代の味を知りれ
いと[redacted]いふ考へが、油然として湧く。
□お小紋さふ場合。然るに茶のは
[redacted]今は居るぬ。茶のみ[redacted]のみ[redacted]ず、大衆
を抜して、名料の様へ[redacted]居れ。不男と縁を
結ぶ[redacted]んど、そんふ変つれ氣合の女は人を然
求められぬ。時代の変遷は[redacted]薩摩[redacted]る。

れぬのだ。

□秋の日は益々傾き早く入る。黙燈頃

空想の間に

とふつれのて、湯に入るべく綾雄は室を出

れ。

□船室に入て見ると、昼の間の疲を休める中

に寝立て、時を拭いて居る一人がある。金頃

は綾雄と差は見えぬが、綾雄の脊せて居

ずっと脊せて居る。髪の毛は赤熊のぬく

逆立て乱れて居る。然して其眼の鋭さは、

怪獣の如く底光りがして凄く。

□綾雄は何とふく

不快の感を生じ[redacted]。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

□綾雄は[redacted]夕食の給仕を勤め、お栗

を捕へて、長髪の脊男を就て問て見れ

ふ、想像の如く他の客のそれで、凝多の場

合は人ぶとぬ人ぶとふ事もふ、殆ど半狂

人で、中に傍る寄付けぬ。給仕はチビ

ぼうりだと言つれ。

□如何れ人かと聞くと、お栗は、耶蘇だ

と答へれ。

□段と問はれて見ること、向ふる見そる都合

は[redacted]ニコライの[redacted]

所へは病気を必ず[redacted]書生さんが留守番を兼て時を来る。あの人[redacted]それで籠田と

いふのがさうだが、都合は悪いので、

時を入れて[redacted]て居ひが、それが如何

しれのか、彼方を止て、代へ移れ。仕ん

で[redacted]されたといふ。導。宿料を[redacted]

すは[redacted]で、宿で困って居る。

帰宅場合は金子の有りさうな顔して贅

澤を並べ立て、長座を上る迷惑する

のが多いが、あの人は初めから

ちので、立て[redacted]で待遇して[redacted]、格別

の[redacted]では[redacted]

□これでは中が、自分の処のみ押寄せる

現由が分かれ。

□だが、自分一人の客を成つて、女中の数は相変らず十二三[redacted]。他の宿の様な盛りはの気備へれるなどは違つて、[redacted]其儘皆好けどてあ[redacted]るすがもう、それが代りし、耶蘇にな来る。つひ、面白いので筆の方は進まぬ。実際、綾雄は斯く多数の女子に包囲されて、朝から晩まで暮らした事は生れて初めてなので[redacted]で、困りもするが、又嬉しくもあり。帰らねばならぬと[redacted]又知りながら何日までも居[redacted]ひくり。変な事になつてしまつた。

□耶蘇といふのは[redacted]魔法使ひでもあるかの如き意味で、女中達は呼んで居るのだ。あの人は耶蘇がといふ言葉の下すは、忌憚なき意が[redacted]気分は含まれて居る。[redacted]鍛冶田が虐待されて居る[redacted]知るべし。勘定する様を描いて書ひ、

□これも主人の好意で、宿では無銭で旅費まで[redacted]持たされて[redacted]帰京を許された。何日までも居ろと綾雄は[redacted]れ[redacted]るさまり、其方が自分も結局利益だらうと居る。[redacted]然うして自分も、[redacted]最も長くは留つてへれ。[redacted]会られぬ。[redacted]るかくすると耶蘇下ふふねばならぬと気が着いた。

□[illegible]『み[illegible]が[illegible]脱線したのは[illegible]

籠田が[illegible]て[illegible]日目であつた。嬉しさを耐えず[illegible]初めて「面」を命じた。酒を乗れば中は[illegible]

□其所へ真鍋が来て、首を振りながら、且那へ今日は如何

『すてね、珍[illegible]』

『喜んで見られ[illegible]が出来れば上つ出来ません。其奴ァお目

『へえ、作が出れば[illegible]

『真鍋さん、三味線ですか。[illegible]お聚[illegible]よ』と

お栗はくふ。

『それもなるが、且那、その作を一ツ遺んで聴

かせ。あッしは遊び芝居へ行く

てえ譜ですは[illegible]のでお呉んふせえ。あッしは能く

や、拠所師の民公おんぞ[illegible]大ら塩の金之助

どを遺んで貰つて、いくらか気を慰めて居るんで

さア』

『お前が聴くて呉れるから、それァ遺んでも

ばいが、然うすると[illegible]と[illegible]ん他の連中が逃げて

ろうから』

59 右

□綾雄(あやを)は酒(さけ)の力(ちから)にも誘(さそ)はれて、

『ぢやア譲(ゆづ)らう』とおつれ。

□斯(か)うなると、眼中(がんちゅう)は、[redacted]女[redacted]を

國を劇場(げきぢやう)で初(はじ)めて本譲(ほんよみ)をする時(とき)

かの様(やう)に、腓(すね)を擬(き)めて『ぬッ覚(めんがく)』の序幕(じよまく)から譲(よ)

容(い)れぬ。

逃出(あげだ)さうと欠伸(あくび)をしやうと、そんな事(こと)は如何(どう)でもいゝ。

出(だ)ぜられ。

□新脚本(しんきやくほん)をもつて劇壇(げんだん)に打(う)つて出(い)ざんとする より他は撰擇(せんたく)

英氣(えいき)満々(まんまん)たる[redacted]一青年(せいねん)と、耳(みみ)から新(しん)空気(くうき)を吸(す)[redacted] 新空で氣を 傑作でもくてる大際ホく黙って聞くのだ。

を持(も)たれぬ [redacted] 一盲人(もうじん)と、相對(あひたい)しれ。[redacted] 新聞の雑殺を猶更(なほさら)讀んで耳を傾(かたむ)けるのだ。

□[redacted] 女中(ぢよちゆう)は[redacted] 最早(さきさ)ひの日は 眞彌(しんや)が 米(みそ)へ取(うれ)るを噪(ひび)き出(だ)しれ時(とき)

---

『揚(あげ)しれッてほうがさア。旦那(だんな)を二人(ふたり)[redacted]

[redacted]差向(さしむか)ひで結搆(けつかう)[redacted]』

『だが、今(いま)までの様(やう)な甚詞(せりふ)廻(まは)しとは違(ちが)ふの

だよ。難(むづ)かしい言葉(ことば)が遣(つか)つてあるから、聴(き)いたッて

面白(おもしろ)かアないよ』

『だッて劇家(れくわ)が芝居(しばゐ)でせう。人(ひと)に見(み)せる芝居(しばゐ)

[redacted]でその甚詞(せりふ)が人(ひと)に解(わか)らねえちんてんぷ作(さく) 然(さ)う甘(あま)え者(もん)でもありませんぜ』

有(あ)りますめえ。あッし[redacted]びッくり[redacted]

□眞彌(しんや)は見(み)くびられたかの様(やう)に取(と)つて、[redacted] 燄火(えんくわ)を

[redacted]切(き)つれ。

小助

と同じ形式をとって

□綾雄は熱心の極、額の汗を拭ひ〳〵讀みつづけた。眞綾は、食卓の上の膝組を載せ直して聞入つた。

□分かれ。

□と

□これで圓満だが

□如何かね

綾雄は讀ろうと

□と問ふた。

□然うですね。

分かるかあ

□りませんや

□と

□得意で讀む内容は不安がある。熱心な聽く方は不安がある。俗受を狙ふとすれば全然此の俗は負けである。と云ふのが前者の不安で、難解の句を耳に入れて自分は考へが分らぬのは、それ程の時世に慣れて居るのは、いつと思ふのが後者の不安だ。

# 合ノ

膝組の儘後へ身を引きそらせ。

□如何かね、お前の意見は……

□然うですね、あゝしが考へ方さう……

□自編である。これを百回いと眞綾が言つ

□それはお世辞よりは受けぬと言ひつゝ正直。

綾雄は膝を畳んで尊敬する足

十二

十四

□[illegible]蔭澤[illegible]は全く客が絶えると言つて
れ。流水場の唯一人の繃帯男いよ〳〵出立
とおつれ。しかしの[illegible]へやすくれの
が六七人、陽命ですぐ逆るふ、停で行くの
は止せとくふ事。靴を持つ、洋傘を持つ、
袋かふの土産物
供は立つれ。今日を〳〵て持て
□勇編も見美
らい草れて出れ。
□川ではコツ〳〵、矢張石ぐが鑿を置つ



て居る。吊橋を渡つて、橋の
方を見ると、残りの女中達が欄干に凭
つて、手拭を振る、袖を翻けす、
也惜んで見えるの何かに[illegible]が命の美像で[illegible]
□お新さんは全く感心。あいしりぱと
も長年居て、十數の客の出入を知つて
るが、お新さんの人氣はたしかなんだ。然
う云つちやア悪いが、百面の素性を置い
れかふつて、如何はいきそんぜもと眞鍋は
いふ。

「今は再報れば分らぬ」と綾雄は学けれ。

「そればかりぢや ア[redacted]ありませんぞ。お前さんは豪い

処がある」と直彌は揚ふづく。

「何が豪くんだ？」

「内賢ぢやせえ、女中が蔵方見遣るぢや ア

ありませんか」

「それは閉だ分らぬ」

「然うで[redacted]ありませんや。いくら閉

だ分らぬ」と、ぱら氣を揚へては並べるのえもんで

す。とふが、お前さん、深刻を抜へふかつれの

で、これだ分らぬ内賢ぢやせえ、他の者は振向いて見ませんや」

「そんふものかえ」

「時頃ぢや ア お前さん、[redacted]の風像を悪

けれア、[redacted]の風像ずいと悪くかつれ。お前

さん位の年頃で、一人で来て、十日も二十日も居

る内は、何か事件を抜へて抜てますさ」

「儀ては それだの腕が無いもんぬ」

「昔の[redacted]兄治石を割るのは腕も

入つれそうが。ふアるおめさん、今の女中は一寸顔
して8落ちそうすぐ』
『然』でもあるそうく』
『已明きの癖』は何んでも見えぬえ人ぜいアロと
真編は喝倒を食はれる。
□女問題既や湯方へ著い[redacted]線道者車は直
ぐ出るくるる処。美くいで綾雄は乗つて。
□[redacted]プラットホーム[redacted]は流水樓の女中[redacted]は垣を送つて[redacted]口をる再
好[redacted]をすゝめるである。

□一時の恋愛がごろ〳〵
軽がつて居る様な
言ふのであるが、より
や女中達が皆然
よし[redacted]又然さうで
あるあるくし。
[redacted]自分の
それと関係しれ
事ではふいと綾雄
は言葉を返へさず
ま解しれ。

□寄ふくつて如何そうするか。成功してる寄る。
出[redacted]見る寄る。自分は[redacted]陰像の湯[redacted]は
[redacted]中達8忘れられぬ
と考へれ。それと同時に東京の湯つれ湯屋
の事を思ふべると厭な気づて帰りれく
ふい[redacted]
□馬車は[redacted]時[redacted]構内をさせん
出発[redacted]紙[redacted]を[redacted]て、帽子を振つれ。女中達は手を
[redacted]て[redacted]綾雄は車
窓ゴ[redacted]て皆見送て居る。真編さんが見え
8居ぬのを、[redacted]方へ向いて女帽を振つて居る[redacted]。

□[redacted]

□故郷を[redacted]る時[redacted]少し夢ふ。夢の四ツの[redacted]の[redacted]

でありれ。

## 四の巻

□お[redacted]舞綾雄は二年目の春早く、友の細谷辯之助と二人[redacted]して、サ陰澤の湯の宿に入つれ。

□それは梅見に第の友六七人と杉田までに[redacted]れ。それから急にサ陰澤が慈〻く[redacted]て、

□小田原迄で書れから箱根へ宮ノ[redacted]ちらばしてけれど

二人で反れれのでは。後の道中をいぶ出で有て行くから旅費を合領して置く様

註文[redacted]でありれ。

小田原まで来れ[redacted]箱根まで伸しれとふ

[redacted]では、ちと遠過ぎる。[redacted]し結雄の意氣ではない

[redacted]蒲田まで[redacted]叶へ伸しれのです。

[redacted]。[redacted]叶へ来れのです

ある[redacted]。[redacted]の[redacted]

いや[redacted]の[redacted]しが無くつ

る、叶一方へは[redacted]梅見の[redacted]

程サ陰澤に[redacted]焦がれ搖いて居れのである。

強要る叶一方へ反れる様に自分で計略を

取つれ澤ば。

□細谷も亦強て出百へ及れなので、それは又それだけの自負が有る。

[redacted]

□細谷は貧乏の堂々たる家の[redacted]で、両親が早く亡くなって、五六年前朝夕を[redacted]の手で成長したので、学問へ進学して居た。[redacted]

[redacted]の組織して居る幻[redacted]

珍らしい代物だけ[redacted]

て居て既に時日の推移と共に自ら[redacted]

幹旋の労を取つて[redacted]

□細谷の洋行前[redacted]の恋人が有つた。事情[redacted]

[redacted]深ふる恋は洋行しぬ[redacted]

しれ。世間恋人は貞操を待つて居た。

□六年目で細谷は横賓へ着いた。其日、恋人は病死したと云ふ悲惨な話がある。

□それで細谷はヤケを起して、無茶な放蕩方をして、勉めて感情の麻痺を謀つた。其結果、大分悲観する事が出来たが、それでも隠忍居史の順を追つて其相手な

恰度 ちょうど
ちょうど

成つれ婦人を調べて見ると、容貌は終て一貫して居る或る型があるのが分る。

弘んが戀人の顔を行処か一、似れ紀の国

る女ものみ細谷は選んで居れ。

□五年の夏、[redacted]非常に忙く

時、細谷は濱水楼に一晩泊つれ。其

時は何となく女かを知らぬ。非常に良く孔

んが戀人に似て居るが有つれ。そもも

見せい。細谷をそして

□式熱が杉田の[illegible]

[illegible]あれのを、結雄



[redacted]

[redacted]陰澤へ主郎を誘つてれの来とは違う。

[redacted]陰澤の中の一人[redacted]を寂しして[redacted]

[redacted]

[redacted]

□時が時[redacted]

は大[illegible]を[redacted]て、

[redacted]

二十三番目

弘ど客が急い。二人へ

され。

□結雄は最初の[illegible]れ時とは違つて、

一躍して紳士の面目を躍如。これ

は併し紳士の同行とくふ事を考へぬば
解らぬと思つた。

[illegible]

□既う紳士は立派な紳士で、流行の二重外套を着て居る。金時計を持て居る。宝石入の指環を出始めて居る。文士で[illegible]は無い。

綾雄の無外套の着せ姿とは中々比べ物にならぬ。

□併し女中達は皆、綾雄の方を歓迎する。

[illegible]て、かはり[illegible]顔をさらして、[illegible]をしく[illegible]

□勿論　新年の内で半分は既う場末で[illegible]行つてれば、下つて居らぬ。補充として新しいのが居るのが、それは又当番[illegible]ばかり顔を出しては来ない。

□まア本統よ　お珍らしい　では有りませんか。何方　昨年の矢張りいつもかはらぬ[illegible]それのです。　ともお栗ちゃんは[illegible]を言ふ。

□来れないつれのがゐれど、つい、用事が重

ふてこゝにふと綾雄は真面目に言葉を挟んべて居ると、又涙ぐまれぬ中が同じ様な事を言ふ。

□入学り立ての頃の寄宿の方部屋で覚えられると思ふ中に、去年の秋の十番の寄宿だけは、能程辛抱する所を隠くれたと、綾雄は嘆かれた。

□自然不平ふのは細谷である。夏の盛り暑さ一泊の寄宿では申し訳傷て居ないので、つい誰も親しくは話り掛けぬ。

67番

曰く森君、飯を喰ふがヤアふいかと細谷は勃然として調子で言ひ放った。

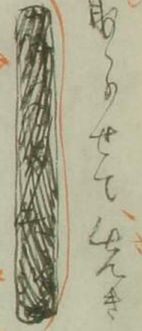
フラフラ

□酒宴と成ると一層女中が集つて来て、相手を為る。待つは新顔のうちが賑て

[redacted]大分賑はつれ。

□それでも細谷は浮かぬ顔をして居る。

□綾雄は前[redacted]は比べれば少し[redacted]酒が飲める様な風して居[redacted]が、細谷ほどは中毒して行かぬので、泊の間



家を取らせて、先きへ家てろつれ。

□細谷は藝妓を呼んで来く、ぶど言つて居れが、筆墨を賜いて、それを出して、後から同じく方へ家を来れ。

□細谷君、如何。あれば来れ中を男の目的のは居れかぬと結雄は問ふれ。

□居ふいんびよりと言つて力ふく細谷は床の上に倒れ。

□ぢやア下つれのがろうい。

□彼は然るの知れん。

□で8まぬ翌日朝て見ふけれは何るうく。

□それア然るが。何ろ〜言ふ後は家る詩り。

□細谷は

少時立僵で居れ。

□結雄は筋を於て、人を慰ふ方を家を慰るふれ賢さを覚つれ。

と言さ思いいまで。

□河内の岩石は、あれから段々続いて割れ

十分へ入んで居る

如うて家て居る。

とゝえて、水の音の喧しさは、実程耳を
着かぬ様が初めて来れた時の様な感じれ
のかゝせべて見ると強ど音が無くと言つて
好い位[redacted]。

□それは偖し山石が[redacted]れであるか。
或は心方の感情が磨滅しれ[redacted]
かゝるか。

□彼の時心血を注いで書いれ文覚は、
[redacted]白論、舞書する上されあつたが、
興論新聞の紙上で発表する事がさつて、

小説と芝塩の紹介で、



成る一部の人達は俗劇の技倆を認められ
れ。それから花柳界で呼客せて、覚書ふく一戸を構へ得れ。劇されは
彼の人の心のぬ行であるが。それは大隈伯路
着し掛て居る。それは見事な出来栄を終
りつゝあるので。
――到底自分は恋を捨げる決心は安いので[redacted]で、
閑は、結婚は何時のは眠てそろつた。

□朝起きて（寝ぼけ）島へ入って、食事を済ませて、新聞（何の用意もなしに来て居るもので、詩集一ツ読む事が出来ない。）を見ると（昨夜）遅くまで起きていたので、結雄は細谷を誘って散歩をしてる事をしれる。

□塔の峰（島）が遠くから見えるので、塔の峰（島）へ登り始めて来た。細谷はグン〳〵先へ行く。結雄はボツ〳〵後から。女中が一人走つて来た。

□誰か（お）陽さき仕合せ（お）しいって今お上さんを叱りなさいの妻がお伴をするとこふ。

□見ると島田よりの結立の十六七の色の白い少女。

□あッそれは市岩学校の山と結雄は言つて立留って、一息つき乍ら結雄は何時此方へ来れるかいが新顔だろうぬと思ひ乍ら、島田のふもとは芝原の暗晩は大屋お脈文のでしれぬと話しけれ。

□お前は顔をせもつれぬ

□つい、我慢をして居りますれのでミ

曲の無い濃い毛髪を

□ それは感心な嫁入の支度かね。

□ ある、一体ですわ。

□ 如何に話しにくいんでも、見ずに四角に結雄は、初めて昨晩、頭頂は
羽織を結って、手織縮緬の袖衣の紐かいのを着て、
朱塗の圓盆を密かに、さア撮食へと捕へ
れるが有つれ。それ
□ 色は白く肌つて居る。言葉が悪く直って
居る。見事に
□ 前年
つて、見
る資格が無
る方で居れのだから、

餅り動作は成る程
場手で見逃りすは事ありつれ。
□ 何んとか言つて
羊羹しくて……見事へれよ
□ 蝶と申しますの……如何せ妾ちんざお
忘れですわ。あの時分は妾ちんざ、お嬢様
へちんと出られて
□ 然うでは無いでいらつしやいますの。僕が初めてお給使して
□ それは、お蝶さんぢやアないか。
□ それを覚えて居て下さいて！

□ 何んです初めての印象は悪いんぢよ」

□ おはこゝ。妾よ あのね お宮様の前へ

ぢれ初めてちんですよ」

□ して見ると縁が悪いんがぬえ」

□ 今度は既う妾よ お座敷へ出るわ

すると、お邸麗こ上りますね。既う序在ます

の」

□ ぬ、如何ぢやアさく、是非妾とお呉れ」

□ です、お車が居ざりますぬえ」

□ 車が有つてもねくぢやつさくいか」

□ ですが、お一人の方が既う序在ますね。

今度は一昨年の縁は長く云るつしさく

ぬ、櫻の頃では本統に陽ですわ……」

□ 話しながら折曲つれ岩坂路を上ると、山上の

平地、世所で紅谷は待合せて居て。

□ 大層手間取つたぬえ。君は息が弱いんぢよ」と

言捕まへて籠雄の後のお蝶をぢれ。同時に一足

不圖出て。

□ 中籠は有るよ」と叫んぢ。

□ 籠雄は吃驚して一足下て。

78谷

「如何した、君？」

「いや、非常に好い眺望だ。梅も彼方に日当りの此所は好い。咲[redacted]掛けて居るよ」

「いや、途中まで来ると お蝶さんが一緒に来て呉れないんだよ」と綾雄は後を振向いた。

□お蝶は綾雄が振向いたゞけ横へ身を避けた。

「君は名を知って居るのか、其女人の……」と細谷は瞳孔を据えて問ふ。

「此人に始めて僕は紹介して貰つたので……併し白状するが、名前は今、途中で聞いたので……」と綾雄は笑った。

□細谷は既う眼中に女人が無い。

「ねえ、お蝶さん、此人は言んな薄情な人なんです。私なんざア唯ッた一目見たんでも貴女の事は忘れないで居たんです」[redacted]と行[redacted]家の令嬢に對する様な尊敬の言葉でお蝶に話し掛けた。

□お蝶は返辞をしないで、綾雄を依然と瞶めて居る。細谷が後へ廻つたから前へ出さうと

態度が見える。

□去年の夏、青あらあは（あの怖くて中で廊下へ）右細雄が来て

[redacted]居てものを見て居て、[redacted]るる[redacted]れさうな、

私の[redacted]

逃げ[redacted]んで青白い[redacted]。青あの方では交れて

居てものを見て、私は[redacted]ヤンと眠憶して居る。あの

時の活紀は誰かの描りで、中形で[redacted]の[redacted]し

[redacted]が大層面白かつた……と細谷は語りぎ

れん。

□あツ然うで[redacted]花子[redacted]れぬえ、変な思ひをさし

[redacted]れ□とお蝶は言ふ。



□これは[redacted]く、能く思ひて見られますれ

ぬえ□と細谷は輝きを顔を[redacted]て青れ。

□青郎は横[redacted]の[redacted]館の[redacted]中でしれ

ぬぬえ□とお蝶は言ふれ。

□細谷は急に又顔色を変へて。

□ぢやア[redacted]張[redacted]は無かつたのぢと

[redacted]れ。



□三人はぶら〳〵と歩いて、今は休んで居る

大ら鳥の前で来れ。

□綾雄を中心として、細谷が左、お蝶が右、細谷が右へ来ると、お蝶は左へ出る。

□綾雄は[redacted]の目的は、このお蝶で有ったのだ。自分は此所に二人を置いて去るべきで有ると考へて。

「一寸、君、此所に待って居て呉れないか。僕は[redacted]が有るんで、ハガキも東京に出さなければ成らない……」

「直ぐに戻って此所へ来る」と言ひ捨てて。

□細谷は非常に喜んで。

「あッ、然うか。ぢゃア早く行って来給へ。何時までも僕は待って居る」と言って感謝の意を表す。

「……」と言ってお蝶も来さうする。

「いや、それはイケない。細谷君は、此所を能く知らないんだから、お蝶さんが居ないと困るから。僕は直ぐ又来るんだから……」と

二迴



畫

梅の下
二竜山
紅さと
鳴田の女

言って綾雄は去ってゆきました。

□お蝶は迷惑さうな其所に立すくんだ。

□坂の下りにまで行つた綾雄は後を振向いて見ずには居られなかつた。

□蕾の多い梅の下に、二竜山の細吉が立ちくゝまるのを、其陰からお蝶の姿は隠されて能くは見えないが、何んだか迷惑さうな様子で見えるのが、[redacted]であつた。

□綾雄は一人で話しながら家へ帰つて見ると、霧小紋の羽織を着れ男が来て、食卓に凭りかゝり煙草を吹つて居る。それは真鍋が。

□「お前お着きがさうですね。後すつて許りで直ぐ帰りますと」と真鍋は話し掛けれ。

□あツ真鍋君。今日は君を呼ぼうと思つて

居ちんだ。能くまて呉れぬ」と結雄は言ひあがら、食卓の向みへ坐つた。

「昭和は あッしも忙くッて、ちッとね、福島の方は 二組ばかり お客が有りまして、上下駅持さ」

「私達の[illegible]を結ばねば」

「お蔭で、[illegible]」

「今は藏が建つだらう」

「蔭ちんざア 江戸ッ子の妻てるちんぢゃ[illegible]」

# 明治

ちんや。それから、あッしは、陽本町の方への道端へ櫓で植えしんで 白碑で一ツ建てときてえと思ふんで……」

「それは ねい思附だぬえ」

「あッしぢゃそこれで名は[illegible]遺してえからぬ」

「陸そこれで土地も変るからぬ。魚籠人の賞あるからぬ。名を[illegible]すのは白碑ちどはばく、ぢらう」

「結雄は 眞鍋が名誉心を持つて居るのを憐れんだが、併し又自分の幸も考へて見ると、[illegible]

近度までは　手ち待　それ　ものの。路傍　石碑
を　建てんとす。人の　企ては、ちと　変はれぬと
思つれ。
□人が　変ると　云ッアッ　お爺さん、此所の　中も
大分　変つれでせう。と　瞳の　上を　傍の　ぬく　背を
雲　ぶつ　言ふ。
□半分は　変つて　居ぬ
□お　院主様は　行ッ[redacted]ぬ。長殿
が　出家ッ、すんく　下りなさア　得て　算司
れ　処で　二棹　留り、ミサオは　無えと

評判でね。へッへッへッ。然うでる　仕方くぢち
ッアいくら　絵料を　渡めれッて、長殿の　出来る　譯
がごめせんや。
□然うだ　ぬえ。と　絵雄は　差へ[redacted]、顔
をつい　輝めれ。
□真鍋　ては　ちが　ぬるぬので、又　話を　変へ
[redacted]。
□てえが、お客が　悪くいや。此頃の　お客は　種が
落ちて　来ます。ちる、それは　お爺さん、表面は　立派
ふ　千金　だが、裏へ　廻ると　カラ　ぴらが　ぬえ。

所へ行くとお前さんへあざア本統ッち山石蓊蟻だ。あッしは能くお前さんの幸をお帳場へ行ッちゃア話すもねえ

□おむとかしふ差しんが居たりめえ□と結髪は貴へ話を反ふさ〳〵しん。

□ほかア有り方ぜんや[illegible]それは[illegible]おらの身始りる事の中ぢやア小しは[illegible]方でしんが昔のお小袖もふtcべて見ることお話る絵りそんなもと自分の眼が見そるる橋ふ幸しも眞鍮は言ふ。

□お小袖とそふのは、そんあるを差へばッれるん

ぬえ□

□まア有りそんぬ。だが此頃やッと[illegible]其の後継が出来[illegible]そうまア。

[illegible]つる品は幾分か下り方ぬ□

□誰がいゝそれはこの[illegible]

□そふお前さんが一昨年[illegible]あすッれ頃は、者が見習で、磯を能へは[illegible]で居ッしが、顔そ見れア思ふ[illegible]ふさ〳〵ア。お蝶と云ッてね、早川の者でさア□

「おッそれは 今一緒に 塔の峰の 麓まで行
って 来れが……」
「如何でも、よく 解って ござる」
「見事へ 行くよ 」
「れッれは 山間で は 青 [redacted] 滝で 垂れて 居
さッたのが、ウガヤアお爺さん、 青 [redacted] 様
つれが 有りませんか。これから どの位
前 分りませんぜ」
評判が 立つか 分りませんぜ」
「既う 祝腹を 買って 置 これ者が 有るだと
うぬ」と 思ひつれ 問ふそうな
綾雄と



「あッそれは 無い 嘘です。有れば あッしの
耳に 入らぬえ てえ事は ないぜ。いや 耳に 入る
ぬえず、あッしの [redacted] 眼に 見えぬえて
え事は 有りませんや。 [redacted] 今日までは 大
お去ですがね、大 [redacted] 行 [redacted] 拵つた者で、いく
ら 替つても 女中 てえ者は 同じ 様な事
なして ござるよ。 [redacted] 直 [redacted] 自から
(前同じ様な事を繰返して)
人の 無い 方へ 煙管 [redacted] を 持って 行く。
岩の方で 目明きの 婦人が 居ちゃいるが、 [redacted] 話
世話の 焼ける [redacted] 。 [redacted] 、 能く 繁昌する

だと[illegible]思ひちがひを（綾雄は）禁を入れてすゝめて居られへ、ぐッたりして紀谷が帰て来れ。

「如何だッね」と綾雄は何とはなく問られ。

「梅は赤び咲かないよ」と言って[illegible]（二重外套）を脱ぎ捨ての、直ぐと手拭を提げて湯へ入った。

品

□紀谷が湯から出た時は直彌は既に居ふかった。

81/往

□しかは何となく、入替りを替り遊びに来るが、お嬢がけは如何[illegible]来ない。

□紀谷はあれから後の事を綾雄は聴きたいのが、其様がこと無い。

□午後は二人で入浴した時[illegible]誰か居る様の様子を、綾雄（無論）口をとがして。

「君の目は[illegible]なあれば[illegible]ぬ」

「あれば[illegible]」と紀谷は答へた。

「[illegible]君の一貫[illegible]して居る形式……或人の系統を引いて居る……それ丸ぬ」

「酷く具備して居るんだ。いや、併しこれ
は僕の癖なんで、今度のも恐らく然うであらうが。
最初は悉く女人[redacted]突然に見えるん
だ。髪の毛の一本々々まで女人[redacted]え方は見え
るんだ。それが懇親を結んで見ると、眉毛の
形が少し違つて見える。口元の締り方が如何にも一寸ばかり違つ
て見える。何処が違つて何処がイケないと、肢を締めて行くと後は何んは
も残らなく無つて了うのだ。つまりもう恋
人とは全然違つて居る[redacted]のを発見
してれね。それとへ、少し位似て居る所が有ると

82不

しる、それまで一緒に捨てて了つて、今度は非
常に厭がるんだ。熱度が極端に冷却する
と、今まで可愛がつて会ひたいのが反して、思ひ切れ
惨酷な事もして、それで別れるんだ。それが今
で一種の快楽に成つて居る。サヂスム[redacted]だろうねえ
……狂ではない。それで僕は慰められて居
るんだ……今度のあれは併し実に驚く許り
似て居るんだ。眼つきは勿論だ。睫毛の並び方まで
似て居るんだ。口元の、歯の並びの、声の出方
の……見ないけれど恐らく乳房の具合まで

仕て居らんぢらく。既ら併し如何するものか。
必ずや僕は目を覚くよ。ダイナマイトで岩[illegible]
を[illegible]る事ふ今陰を取って……」
「主人揚句よ、陰を相事点を発見しやうと、彼
の女る岩場を張慌酷ふ事をして捧て
るのぬ」
「何んぢる それは元へあいね」
「如何する それは あの気さうぢやアあいい」
「僕も亦あ気さうぢやアあいい。まア君、何んぢる
言はあいで呉れ給へ。いや見て見あい振をして
呉れ給へ。先敵する。へう度は甚だ失敬する
が、僕は白状する熱しく叫ぶは あんまり何も
無く成ってるうの心配……」
「結雄は心の中よ念ってい如何か早く彼の
は逃げて呉れあいかと。
「陽のう二人上って居る処へ、お連様
と有って岩場、小説、川[illegible]村、高内ちど
梅見のう一旦引返して打揃って 山方へ出直
して来れ。
「[illegible]様ふ騒ぎと成って
「そんぢる 山場さんる小説えも、前
金く窪急の声を聖倒れ
七べると大騒
嶮塔の薄
意無く

それでは前年の紀景さが思い養られるである。

□下総書は風ぐ鍋屋で書いれ鮫葉化の小藤むじ〜ふ老ち家は、これは陽〜ぬと詳

嵯の下の方へ出ばがれとくふ歩くと目る

して是則ち新作家[redacted]が、[redacted]

老ち家を証家[redacted]れのであるとふど、氣宿を吐くれて、正〜く文壇を占領

のものである。

□式徳は眞踊は句縁、潭さん藝妓子で味

んで、こ十三番底ばけ。醸ぎをされが、紬谷

[redacted]は昨夜[redacted]醉はおかつれ。

□結雄は結合ます事を醉はおかつれ。然るで

84行

初めて歩いて味つれ薩摩の陽の[redacted]とは書て、

化の処へ歩いて居る様な心持がして[redacted]興味を覚つ

れ[redacted]酷く

ので、[redacted]は一人、明くる日の夕方、東京へ帰る

事にされ。新しいのも舊いのも全て

□女中達は後ろる赤れ車中と[redacted]販や銀[illegible]る。

成って[redacted]

[redacted]て[redacted]で、陽手子で見送

[redacted]

[redacted]は[redacted]お踊唯一人であつれ。

□ 〇 饗 白子アニる

フフン4

□（其後）二年目の夏、[illegible]は箱根の湖畔に[illegible]

[illegible]る[illegible]を[illegible]

[illegible]三四日目の箱根行を企てた。

□国府津から湯本までの鉄道馬車が、今は電車よ[illegible]る[illegible]

の優で有つた。

□併し[illegible]入つて湯本へ着いて見て電氣の[illegible]いて居るのは驚いた。停車場の位置も変つて居て、新宿は山間の[illegible]

が有つたのが、今では殖産的の新市街の様ふ[illegible]

[illegible]

[illegible]する。

□沒客の後を歩くのが場末の縁日位な賑つて居る。

□徳[illegible]川の橋を渡る。[illegible]変つて居る。其所から見え

る滝水樓は不[illegible]城のごく電燈で輝いて居る。

奥の方は新[illegible]の建[illegible]見える[illegible]

のが往時である。

□箱根は[illegible]て電報を打つて置いたので、

[illegible]は、ずいぶん混雑の中を[illegible]

を告げた。[illegible]が[illegible]

□それでも[illegible]

[illegible]の待遇を受けたので、大概

どの室でも[illegible]して客が入れてあ
る[illegible]。然れば[illegible]場
所の場合の様で、中[illegible]落着いて入っては
居られぬ。

□食様の上に一徳利といふ設おそれ
が、中[illegible]。

□女中は、第一回[illegible]費へぬ。
第二回目の時は、[illegible]弥ど居る
ぬ。第三回目の時のも、三回[illegible]居る
ぬ。
待は皆新しく[illegible]ので、ちっと顔よ
し[illegible]居られぬ。

それを運んだのは例の見習する女で、いづれは彼のお蝶の様な部類のものであろう。

□綾雄が第一に知りたいのはお蝶である。如何れ
ほどか[illegible]。

□蛇のごとき執念を持って細谷は阿[illegible]
て、終る非常手段をよして自殺を幸れ
[illegible]。
それから半歳ばかりの間は、細谷は殆ど陰
[illegible]の人と成って居らして居れが
[illegible]。

又例の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

掃って居れ。

□赤ぢゃ私ゝ居るのも[redacted]、是非お姫ゝ達ひたいと思って居る

□ちゃ[redacted]へ。

□ちゃ[redacted]さん、此方ですかえ。と感動の低い声で一併し何の手わけも先ゝ掘り出で眞[illegible]

□誰かの掘り出ぢゃ[redacted]首掛の仁平惠し、縮[redacted]の[redacted]は博多の角帶とくふ[redacted]ハデな拵えそして居る。大電燈の光で分醉って顔が[redacted]て見える。これが拵等[illegible]居るか。

□陰暗へ隠れ[illegible]んがのとは見えぬ。つい先頃笛を吹きながら



なんぢる風つれ謡州掘蒸枝は[redacted]似て[redacted]眼で

そうえぬ男拵は此方がいい。

□あッ眞弥君、ねく来て見られれ。

□あッしはなく来れが、お前さんは悪く時ゝ来れんだ。夏場は[redacted]ゆッくり話が出来ぬ。ちゃアごめんか。と言ひながら頭からかぶる様ま

□ちゃ一晩もりが。羽織は上まで行くので

□[redacted]唯お前の顔が見たいと[redacted]

[redacted]お前さんが世話が云へる様な成つれぬ。

□あッしゝ[redacted]お前さんゝ焦

がれて居れんで　話が運と溜って[redacted]
[redacted]で、お前さんで　これは他の者は面白かア
[redacted]　[redacted]　[redacted]　[redacted]　[redacted]

「あの女は如何ですね」

「をきちやアこをすがね、酷い病気な性質でね、毒を盛りけれんですね。家へ帰つて養生をしてますが、又其内病院へ来るでせう」

「細君を怒んでゐるんぢやあ。」

「怒みすぎたせいもあるが、第一御のりてすぎア。」

「誰か先に居まれのでせえ」

「直ぐで細君と互ひ[illegible]高下で[illegible]走らして。」



「真弼さん、如何にもこれの、彼方のお客様がえきりゝゝお待兼ですよ」

「どッこい、動かう忙しくッちやア、見えぬ」と言捨て行く。

「[illegible]で[illegible]ッ[illegible]えすす」と言ひつゝ、真弼は煙管を[illegible]ひ掛ける。

「益さ[illegible]景気ぢね」と綾雄は言ふ。

「上景気れッて何んだッて紙相撲は[illegible]すすぜ。これで電車でも埋めて[illegible]ちゃんぢゃ。どの位[illegible]分[illegible]」

「益さ真弼君は当るばかりが。これでは

樹を植えて自分の碑を建てますと言ひました。

おくつちゃア問はるるもの。

□ や、然うえばおまえさんも、ほい仕者ま成んちすッれッてゆえ。今度のおまでちすッたッ、又何か誘んで聞かして下せえ。何ッませえ、夏場はイケテんや、夏場は……この秋まで入ッッせえすし。待てますぜ」と言って鼻

彌は[redacted]ッてて[illegible]。

□ 鼻彌の言ふ程ほい仕者すは成って居らめが、今は自作の勝手も朗讀して七日目の[redacted]ふくてるほい境遇より居ると、綾雄は傷苦笑[illegible]。

四四

□ 翌年の秋に入って、綾雄は小翁の[redacted]の從者すべく薩摩の[redacted]。これが四回目である。

□ 電車は通じて居る。停車場は[illegible]揚揚が賑って居る。滝北樓も更に三層樓

が出来て居る。綾雄は其二階に陣取る。

□女中の粉もの新しくは俗謡を歌って居るが、殆どそれは知らぬ顔。

□客は[illegible]夏場所なので、客は少ふく、一寸寂しい。

直ぐ隣りの長屋の客は男入の頭髪の[illegible]が多いので、従って[illegible]

お寺、山間の湯治場とでもいふ[illegible]の[illegible]

の旅舎とでもいふ[illegible]感じがして成らぬ。

□綾雄が[illegible]沙翁劇を翻訳する[illegible]

91/花

地方田舎の縁談がある。それは和歌山県の時は田舎しんぺいの口を利かなかつれが、綾田と結婚耶蘇が、其後結婚式、新俳優の[illegible]仲間に入

故郷に[illegible]は俗者を兼て居るので、それがこれから

そこの新演劇は、文士の手で成る脚本で

もければ成らぬ事を[illegible]張って

旅長の川本を勧め、[illegible]それは綾雄

が高[illegible]仕であるので、先づ沙翁劇

の翻訳を持ってんだので。報酬は

千円を支拂ふとくふ約束をした。

□勇は文士を優遇して、過分の報酬を拂ふのでは無い。一種の廣告である。利用するのであると、[redacted]

おかつれ

□併し此時は、(事)十郎、薬屋郎[redacted]子ん

で、[redacted]で居る

で、[redacted]旧劇[redacted]で、[redacted]

て居れのであるれ。[redacted]ペーパードラマ

ある、それは今までは[redacted]書いて居るが、

芸術の名ある俳優が大勢

結婚

無[illegible]演劇としての脚本は、

絶[illegible]二流名優の手を借りて有つ

れと悲歌して[illegible]

川本から、[redacted]を厚くして依頼されれので

[redacted]無[illegible]は上せられるとふ[redacted]

しさから、[redacted]利用されるある

されて[redacted]借すすめとふ[illegible]で[illegible]

□それのみならず、[illegible]の[illegible]は、既に書も

の場を脱して、紳士の領分に入つて居る。

新しく妻[illegible]へれ後ろので、パン[redacted]の

[illegible]

労作を落ちぶれたものと考へて、其の調子をたゞ働つた。

□既に今金を取つて入つた可憐な葬式の[illegible]

□[illegible]の春の絵で[illegible]の祝儀を貰へた時は、女中が一かたまりの[illegible]

□其晩後に唯一人で寝れのが、お嬢でまつた。

□[illegible]久間[illegible]しれ[illegible]

入ふしやくまんで

言ひ[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]鉢に[illegible]を次

□見ると[illegible]

[illegible]

[illegible]

小父上は……と綾雄は言ふ。

「そう、まあ、それは久々い前ですよ。あの、一寸忠ちゃんのので……と何の事もふくお蝶は言へない。

「此土地へ、それから此家へ前から見ると大変変つたわけ。

「変つたわけ。電車がぱちぱちして来ないの、市便利ぢゃない。ですから、お客様が繁山入るつしてゐさつて……

「水の音も此頃では殆ど聴えなくなつたわね。

「貴郎は能く陽春で居ますわね。到頭、新緑の山を背負つて前へそつので歩行てゐる。コツ〳〵孔を穿けて居ますわ。氣永な石屋さんが

「其時分は、お前が、頭頂を桃割を結つて居ないの。

「未練な然で陽春で居られる。

「此頃ます事つて、紅白な紅も、浅葉な想が近寄つて、何事かの感情を面に表はす。

「綾雄は蝶蝶して居れば、お蝶は

少しも遠慮も気振を見せずして。

□　あの時分の女中は[redacted]古院の阿母さん

と申して居ります。　言うんお事をして居ますのは、

素性を知る者ですお　と話治ぐ。

□　でも、あの時代もは、一番お蝶さんが若かッれ

ばやッぱいかも

□　それは然うで居ますが……

□　今でも若い方がそう

□　内牢獄を……

□　話は大変な[狂]

[illegible]

の事を語るまま、お蝶は立ッて出ッた。

## 四

□　綾雄は筆を執る、成るべく人の事を

事を新ッて、女中達の飾りに移る

利かぬので、[illegible]お客とも一向寄りつ

かぬ。　お蝶が時を氣を着けて居られる位ふもの。

□　真綾まは、脱帽が、脱稿してから待る事

居る様子と、家の者を[illegible]断はらして置

いた。

□陰流の音は仕ふく成つれが、海て電車が通ることもあり、客種が違つて、熱の時を揚げても、隣方の方で騒ぐので、これが耳を聞いて綾雄は困つた。

□耳を入る三味線、唄ふ声、それも大分若い歳の女他も、大分粉が雑それのがある。六十何歳

と見える。

□それでも彼が男はあけて人が安掛鎖つれ頃は、昔の陰摩の帰つて来る。然るに綾雄も無覚を書いれ時と思ひ熱血が策

の先から滴り落ちる。唯それは保し僅かの間で、利用を甘んじて、家の繕摩のなる書くのだと思ふと、熱血も代つて冷汗が垂れる様な思はする。

□公演せられる日時のふく書いれ時代が寧ろ可薬くと思つては、時を綾雄は溜息をついた。

□老二階の方は若い人達が三四人来て居て、

歌人は発展して居る。女中達の人事は明
それを集って居る。
□単では自分達の梅見帰りの時と思はれ
しれ。若い人達は、鉄砲が嘗(既は)って書く事も
又新しい嘗って居るのと、幾分か冷笑的な
それを見て居つれ。
□審頭の話で、絵のそれは、雲岳舎とくふ新
文士の寄稿の人々とくふ事が知れれ。名は
聞き、世俗は読み、時としては論録を筆の上
で筆はれ雲岳舎の文士達か。けりかで知
女中達の
はよ絶える
(真庚)とふのは、跡蹤の事か。
芥川とは知哭の事か。

無論

る位かも、先方で知って居るのである
う。いつぞや、美花園小藤の老ち氣達を、
知をで宮の下へ押上げれ事が有つれが、
今度は氏方の番で、陽本まで宮落さめて
ひは居ぬかと、若笑を誘ずる能はぬの
である。
□背景
陰(影)を
能く書かれれ。自分を立
しい文士達も立
えかる書くのがるると、
小説は美花園は
絵雄は
微笑を
覚る
初めて発見れ
土地の様子

□五日ばかり居る間は、[illegible]は脱稿
しん。それで明日[illegible]帰京[illegible]くふ前の晩は、眞鍋
を呼んで小宴をする事にした。
□相変らず元氣の好い調子で[illegible]
かりの事は八幡宮の
□見ると黒縮緬の羽織と、お召の二枚袷と
いふ[illegible]大めりで[illegible]である。
□今度のは大勉強でしたね。先生、あッ
しは、七日目で見る時計[illegible]買って古さ
い。
おしれ仕事をしなければならんですッてね。
それ位の所祝儀は何んでもありませぬ。

三味線



あッしは知ってますぜ。一体言ふ千両だッて
ね。ほい勝るお成んすッぺ」と眞鍋
喜んで言ふて居る。
□お前さん呼ばりが先生お成って居る。
□あアは、話るふのさと緒は言ふ。
ある話る山えあ……新聞の親玉で何等か浮かれ
先生る寝揚るぬえだやア成るぬえので
せう。おしれ方お成んすッぺ。元を知
ってるから、あッしは嬉しい。如何ですい、
出来れのを一ツ讀んで聴って お呉んなえ

99位

8

「うむ……本は、まア、川本さ聴いてかるで無くといけちゃくよ……そよ、お前、流行ッおびゆる大評判ですで聴いて居られ[redacted]

「あアこ先生、然うられアせの能弁を断つて居るまかりで先生大きな声ばかア言はれちゃん百姓さんが、封建時代を知らぬえ手合が多くんでね。何んとか良え藝者ばかり大勢ぎ仕さアが出て、下界ばかりでさアお話しるんでや、先生、時代ぢ藝者の内職

はなしが七軒のうち出来ましたぜ。皆んな美味く置いて居るさアこれが此の四を人位家で和枕へ掛つて、お茶挽無してんですが、大既お祭しを頭を……

「然うがうぬえ種ンち藝人が入つた様がが……

「男の方が来てますがね。これが無作法おんんです。何んする知りやア仕うんや、藝のぬえのは当前です。かる世所きで詰藝をするの野暮そうの取巻の心得一ツ知つてるがぬえのですね。発句お客様を依つて

の一ッを相手仕てゝ代稼は、博りを
一人をめ[illegible]のですから、心細い』
『発句と云へば白碑は何[illegible]成つれば』
『それですよ先生、あッしも考へてるんで
ね。江戸ッ子の意地ぞこそが苔を連て。
川柳は云つて[illegible]子がね。あッしは、白碑
を連てるのを止して、蠶時雨を[illegible]して、地
へでも置かうかしらんで……』
『それは如何しん動機ちんだ』
『だッて、あッしゝ[illegible]だッて、女房も有れば



子供も有るんで。年を取つて考へると少し
は考へるさアね。手前一人の名前を殺すなら
白碑を連てゝ死でね、墓の石碑を子
供達が連てるれぬえ様ぢやア、何んする故
りそんかうぬ。何んだッてね何も当節
は人生の事だ。金儲けするなら、へうぢやア
蠶の方が一番ですぬ……既う今は
あッしちんで呼んで居られる客は、一人も
無く成つてゝ。然うすると、あッ
しだッて心細いかうぬ』と言つて苦い〳〵

笑ひながら。

□眞弥が言ひたい事は全く思はずかつて。綾雄と眞弥と秋の冷ややかな覚えて居れ。

□お嬢が戻つてなるね」と綾雄は話頭を轉じるべく言葉を。

□それですよ、先生、それを知てお話が有りますさあと眞弥は言ひつゝ、

耳を立て四邊の物音を聴きつゝ。

□誰も居ませんアイ仕方すめえぬ」

□お嬢さんよ、ぼんよ、表二階の若い人達の方へ知つて居るすで……

□それですよ先生、その表二階へ来てる中、吉川さんてえ方が有るさうですね」

□秋吳と云つて手張文士だよ」

□若くつて美しい男ぢやさうだ。あッしは未だ一度も顔を拝ませんがね」

□それが如何にもれの、お嬢さんの……」

「見染めたんでさァ　手取早く話がね」

「細君の話を知ってる？」

「何んする知れたもんじゃ　お蝶さ」

（蝶の巣の様な偽の陽）

「生地の娘と思ひこんで、何んとか云ひますね、あッしゃは云へぬえが、新左の●洋燈とか……」

「神聖のラブ？」

「新左のラブッちゃって、あ」

「あと甘ぬです。」

「に、を嫁を貰ひすまければ、生きるの死ぬる」

のって、穏ぶれ　直庵さんってえのが中へ入って心配してくんですがね」

「あッ、本統かい、それは……」

「本統ですよ、先生！」

「甘えもんだ！」

「甘えもんだ！」と思ひます　結雄は口走る。

「何んだッて、ぶッて、ぶッて、ぶ

蕎麦が通ぶれのを、どいと
一時に流れ込んで来れ藝人れア ねえ譯
が遣うんでさア。あいしの見えねえ目から晩
んで見ると、何何なる代物か、ちんぷ甘え
ものでさアと眞弥は又〳〵新人の
稼人を捉へ置倒を始めれ。

□よく〳〵癖で醒るのと見える。

□併しあべら、綾雄は公平な考へれ代
調子では客は落ちるべと自分の稼る
悪癖も異って呉れる者は多く

仕方なく眞弥で

有るまい。他に藝人の居ない時代は、
藩足
の世話をしは帰宅して居れるが盲人
で、藝は拙くて世話の焼けぬのを、之は
貴重する縫物
□こぶべきは此の人もびるのが運
命だから仕方がないと思ると、黒紬の
羽織、お巳の二枚袷、陰とめかしんで
眞弥の拵物が却って気に
眼に入れ。

□十年の後、綾雄は五ヶ月び薩摩の陽の
客と用ひられる。それは二月の[illegible]の代
□通されれのは十番の部屋である。室
内の飾りは達て居るが、最初に通されれ
部屋は相当古い。
□十年の間は 綾雄は酷く頭脳を悪くして

それは全く酒の中毒から来て
居るので、天才は全く[illegible]消滅し、詩想
は悉く涸渇した。
□母は死に、妻は去り、二度と[illegible]
名[illegible]
[illegible]
として世間からは[illegible]
の実在を認め[illegible]
□此方へ来て
[illegible]中は勿論一人も知られのは居る事。
それ故、

初めての客として此所へ通さ

れれので

□綾雄は今の[illegible]を殘す甘えん
だと嘗り、最一度自分の時代すると見
せるこゝろ意氣組で、史劇の古阪城と
いふのを書掛けて居る。それを脱稿せんとす
つもりで、此所へ来れのだ。

□靜かな[illegible]りが、相寄るずの[illegible]を絃歌
は其所此所に漂くなし。如え[illegible]の声
が[illegible]前より強く[illegible]響いて、頭が破
れる許りである。

□あれ程を人が力を入れて、氣永く岩を
割ふられるよ、粉塵の飛散で上から上から
押流す岩石は一人工は中る自然力の勝
てぬのを、此所の谷川である。

□それ許りでは[illegible]揺んで居て、一すれ音響ず、強く
ちを感ずるのだ。

□綾雄は顔へる手で猛烈を極めたる時を
眼を開けずて考へると、[illegible]書掛けて居れ時を
山嶽時代の[illegible]所を想像してそれ[illegible]それと

「ア」距離の遠[illegible]自分の紙めて
書れ当時の叔父が西路んで見えるの
□お小夜とくふ陽ぬの話を遠い昔話とも
聴いれ事も有つれのへうは紳のお嫁の事が
治ど者と同じ[illegible]鏡を持[illegible]
つれ

□若き旅客若き陽ぬ幾[illegible]同じ
戀を第四して、然[illegible]甘えん
[illegible]也、順逆りは言て居るがると思ふと
叫ん[illegible]て[illegible]は[illegible]を[illegible]て居る者とは
結雄 現せ



思ひけれちく成て恐怖の伴うれ[illegible]
ド[illegible]て来れ。
□呼鈴を鳴る[illegible]嘉寛を感
来れ。
□おい、叔父、盲目の婦人が居れ[illegible]
すれを呼んで来て見れちくか」と結雄
は言ふ。
□お中は驚き顔をして
□あの按摩の眞驅で出在るの
□按摩？

□前の晩を野宿して居りますと、さっきですが、世の水で家が流されたり、そのあとの藝妓を出して先生の所へ……それから既う目明きの立派な藝人が沢山入んで参りますで……山頃では陽が傾いて参りますと、お能を拝見して……お能を拝見して……時間は昔を知って居ますが、お話し[redacted]相手にお呼びなさいますが、ぬえ……山

□それぢゃ呼んで参ります

（早速）

□はッ畏まりました。重郎8時頃で出発致しますと言ひつゝ、女中は引下った。

□綾雄は急いで顔へ行く支度をして行く。

□落ちる手[redacted]は盃を持つて、それを口へ持[redacted]の方がそこへ溢れ

□先生、[redacted]おッしはお前さん踏躍きやがれて居るかい知れやせんぜ

と言ひつゝ入れつた真鍮は

（焦がれて居るかも知れません）

（細紐の[redacted]）

（ぐく[redacted]）

「僕もお前を連れて行くのだ、此頃の薄暮は……え、如何ですか、すっかり変って来ましたね」

「湯治場ぢやアまいね」

「汽車場の路[illegible]

「[illegible]る意味で於て薄暮は亡びたんだね」

「どいつも こいつも 甘えんでさア」

「眼の見えぬ暫時の赤路と、柏葉の悪い文と、[illegible]を呪ひつゝ、[illegible]を[illegible]」

可哀し氣な声を挙げ、綾雄の頭髮が半白で居る事は真弥は知らぬ。

## 四四

「綾雄が赤坂稿の脚本を、興ある毎ドて朗誦する。真弥はそれを[illegible]聴いて居る。

「真雄は真弥一人の[illegible]服をふて、[illegible]の兄妹が唱歌[illegible]れ如く[illegible]んで頗る強者である。

[illegible]

□然らざる長年人間世界に生まれし盲人の古く趣味を合しれ

[illegible]

無闇に新しがる現代に於ては

中略

荒れ果ての運命を有せぬと

[illegible]を少しも考へるばかりである。

（なほ）